
運命の外側

えそら

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命の外側

【Nコード】

N88110

【作者名】

えそら

【あらすじ】

ここはどこ？ 俺は誰？ そして貴女も誰？ はあ、神様ですか。そして型月世界に行けですか。……型月ってなんですか？ そんな始まり方（捏造）の物語。

要するに独自主人公をFateや月姫の世界にぶち込んでみたお話です。

プロローグ そして運命の内側へ（前書き）

>> 諸注意 <<

この物語は型月世界をベースとしていますが、オリジナル設定・オリジナル解釈が続出する恐れがあります。

それをご了承の上、問題ないと思われる方はこの先をお読みください。

プロローグ そして運命の内側へ

見渡す限りが白かった。

ついでに頭も真っ白だった。

具体的に言えば、ここがどこかもわからないし俺が誰かもわからない。

「……まいった、記憶喪失なんて想定してないぞ」

「ええー、記憶喪失……？ 私も想定してないよ」

いきなり女の子に話しかけられたって居たのか女の子！

……なんで気付かなかった。普通に独り言聞かれたじゃないか。

そんなの気にしてる状況でもないか、切り替えよう。この状況で人と出会えたことを喜ぼう。

「多分だけどな。だからこの状況がまったくわからなくてさ。よかつたら教えてくれないかな」

「そつか、じゃあ簡単に説明するね。君死んだんだよ。でここは世界の外側」

星がキレイだなー。

白しか見えないけど。

あとその女の子、説明しながら俺の体に腕を振ってくるのやめよ？

腕が俺の体を素通りしてて怖い。

……説明してくれたのは嬉しいけどさ。

まあその、なんだ。

「は、死んだ？　なんで？」

「それはねー、私はなんと神様みたいなものなんだ。そして神様のいたずらというか間違つてというか、うんごめん殺しちゃった！」

てへ、とか言いそうな良い笑顔だった。
イラ、ときた。

「いい痛い痛い！　アイアンクロー反対！　蘇生させるツ、普通は消滅したり転生したりするけどちゃんと蘇生させるから！　異世界に！」

あまりに必死な声だったので手を離す。
情けない顔で頭を押さえる自称神様。

見た目普通に女の子だし可愛いけど、これは神様としてどうなんだろう。

普通の女の子ですと言われたら、うんそうだねと素で頷く自信がある。

しかしあまりにフレンドリーだったからついやってしまったが、冷静になって考えてみたらなんとも居た堪れない気持ちになった。

「……それで、蘇生してくれるのは助かるけどなんで異世界？　てか異世界あるんだ？」

「この場所も異界みたいなもんだからね？　あと異世界に蘇生させる理由については、平行世界の君の同位体に憑依融合させる手法を使おうと思って」

「はあ、そう」

まるでわかんないんだが。
やっぱ記憶ないから？

でも知識はけっこう覚えてるみたいだからなー。
気にしないでいいか、どの道この神様（自称）に丸投げすること
には変わらない。

「ちなみに行き先は型月の世界ね」

だからと言って専門用語の乱用されても困るんだけど。

「はあ、それどういう所？」

「え？ えーと、地球とか日本ってわかる？」

「一般常識の範疇でなら、多分」

「なら大丈夫だね。その知識とほとんど一緒の世界だよ。細かい所
はもちろん違うけど、そっちはまた追々フォローするね」

「あーうん、ありがとう」

なんかフォローしてくれるらしいのでお礼言っとく。

しかしこの神様（自称）良い人だ。

間違っただけならいいとは言え、わざわざ生き返してくれるし、
渡る世界の説明も少しはしてくれてるし。

神ってこう、人が虫のようだ！ なイメージあったのに。

でも神様が人と同じ感性とか思うとなんだかガッカリしてしまう。

「あとお詫びに特典つけたげるね！」

なんて失礼なこと考えてたら特典まで付けてくれた！

……心が痛い。

「それで特典だけど、身体能力は上限無し、魔力は無尽蔵、武術の才能は天才級となってるよ。努力次第じゃ人類最強にもなれるスベツクだね」

ああそんな3つも、お人好し過ぎだろ神様（自称）。
しかも魔力って！

「貰えるなら貰うけど……ありがと。でもなんか偏ってるような」

「君は今から蘇生と世界移動ほどの奇跡を体験するからね。下手したら解剖されてホルマリン漬けにされるかも」

解剖にホルマリン漬けて、その世界はマッドサイエンティストだらけなのか？

「……平和な世界に行きたいな」

「えーと、戦時中の国や世界じゃないだけマシじゃないかな。それに君自身トラブル気質みたいだし諦めた方が良いと思うよ？」

諦めたくないよ！？

仕方ない、最後の手段で神頼み　その神様（自称）に公認され
たんだっただか。

ああところでなんでか暗くなってきたんだが。
トラブルじゃないよね……？

「ありゃ、そろそろ時間だね。世界移動が始まるよ」

そうか、特に問題ないんだ、よな？

さすがに神経質に成り過ぎか。

とりあえず別れの挨拶しとこう。

不安や不満がないわけじゃないけど、色々世話になったのも確かだ。

それに実のところ少し名残惜しかったりもする。

なんせ記憶喪失になって初めて出会った人、もとい神だし。だから

色々ありがとう。それじゃまたいつか。

笑顔でそう言った、けど声が出なかった。

まさかの口パクかよしかもクスクス笑われてるんだけど！

はぁ……仕方ないから手を振った。

「うん、バイバイ！」

そして真っ暗になった。

1話 大災害の顛末（前書き）

I want to disappear . 私 は 消
えてしまいたい

1話 大災害の顛末

起きたら病院のベッドだった。

訳わからんね。一体どういう状況だ。

なんでか包帯だらけで体中が痛いのはこの際スルーしよう。
けどなんで体が6歳くらいの子供になってるんだろうねー。

……白い世界じゃ17歳前後な幽体だったよな？

一体何がどうなった。

病室に俺と同じような怪我人が沢山いる。

察するにこの人達と共通の事件・事故に巻き込まれたという所だろうか。

とか考えてたら何か記憶らしき映像がフラッシュバックしてきた。
それは地獄と言って良いような光景だった。

焼けた大地に乱立する建物の残骸、焼け爛れ人の形をしていない
屍たち。

そして宙に浮ぶ黒い太陽。

この冬木市において最悪と言って良い程の大災害だ。

俺はどうもそれに巻き込まれたらしい。

より正確には『俺』が憑依する前の俺が。

外をさ迷って力尽き倒れたのが記憶の最後だ。明らかに死んだと
思える様な有様だったんだけど、現代医学は想像以上に凄いのか神
様（自称）がどうにかしたのか、なんとか生き延びれたらしい。

それにしても変な感覚だ。

自分じゃない記憶を思い出せてしまう。

でもこうなると、体の持ち主に悪いと思　えなかった。

どうも本気で融合してるみたいだ。二重人格を一つに統合するとこんな感じになるんだろうか？

『俺』のが人生長い人格らしいからこっちが主になってるようではある。だからって体の持ち主が死んだという訳でもない、はず。残念ながら専門家じゃないし詳細はわかんないんだよねー。とりあえず罪悪感は湧かなかったんだ。

その後、看護師やら医者やらが来て話をした。

火傷の跡は残らない、後遺症もない。

四日後には退院できるそうだ。

ちなみに寝込んでたのは三日程らしい。

……ここまで尾を引かないほど温い怪我じゃなかったはずだけど、やっぱり神様（自称）がなんかしてくれたのかな。

二日ほど、のほほん入院生活を過ごした訳だけど。

体を動かす毎に、身体のスペックやら可動限界やらを無駄に捕らえられるようになっていた。

これも武術が天才級特典とやらの影響かもしれないが、解り過ぎで気味悪い。

しかも俺の身体が変だ。

人間の限界に挑戦してるかのようなコンセプトしてる。

もしかしたら、『トラブル気質なんだから普通の体じゃ拙いよね！』とかなんとかで神様（自称）がやつちゃったのかもしれない。

涙が出るほど憂鬱になった。

それとは別に、体動かす毎に越えたらやばそうな一線を感じるん

だけでも。

この一線を越えたものが神様（自称）特典の『身体能力の上限無し』なんだろうか。

一度試してみた方が良さそうだ。

という訳で。

看護師さんに握力計を持ってきてもらっちゃいました！。

ちなみにその女性看護師からは「あんまり玩具にしないでねー」なる言葉を頂いたので、「はい」と子供風に返事をしといた。

真面目な話、大災害の所為で病院全体がことなく暗い。

だから元気な子供の相手してた方が相手も気が紛れてくれると思っただ。

家族を亡くし自身も重症なんて人も大勢いるからな。息が詰まりそう。

俺もよくやる……。

いくら『俺』が混じってるからって、大災害で両親が死んだのは同じなのにこんななんて……薄情なのかな、俺って。

それでもさほど悲しくないんだからなんとも言えない。

仕方ないし、どうしようもない。

切り替えよ。

さて、せっかく力の上限無しってのを確かめるってお題目もあることだ。

さっそく握力計を握り込んでみよう。

ぐっと力を入れる。

なんと、右手で『32』だそうです。

六歳の握力にしては結構な数字なんじゃないか？

まあそれは良いとして、ここまでは一線の内側の話だ。

だからここから、一気にその一線を踏み越える

！

ビキゴキ、と鈍い音がした。

握力計の握る箇所は見るも無残にひしゃげ、俺の右手も痛々しい形になっていた。

……………。

血どころか骨も見えてる。

しかも折れてる。

「ッ」

痛いというかいつそ熱い！

あ、ちよつと涙出た。

くそ、体は六歳だから仕方ないんだって言ってる場合じゃない！

とりあえずナースコール！

……………どこにあるのさ！

うう、こんな所でタイムロスしてる場合じゃないのにつ！

右手が複雑骨折でした。

見た目から既に骨が突き出たもんね。

お医者さんからは、一体何をやったんだ！　て驚きながら怒られたな。

それで白状したら急に厳しい顔して、正直に話さない。怒らな

いから。と、いや気持ちはわかるけど本当なんだよ。……信じたくないことに。

そんな自傷事件から一週間経った。

退院が延びた俺とは反対に、あの災害で怪我を負った人も三割ほどは退院していった。

同室だった赤毛の少年も退院して行った。

別段、仲良くなった訳じゃないからそれは良いんだが……その保護者？ の男が赤毛の少年に「僕はね、魔法使いなんだ」とか言っていた。

その人は冗談めかして言ってたけど、神様を自称する女の子とか居たし。魔力無尽蔵って特典つけるってそいつ言ってたし。魔力はあるのに魔法がないって考え辛いし。

その人が魔法使いかどうかは置いておき……つまり魔法あるのか。世の中 不思議で一杯なのか。

それは不吉なフレーズ過ぎやしないか？

神様（自称）公認のトラブル気質な俺には嫌な予感がひしひしするんだが。

という様な事を考えてしまったのが拙かったのか、という様な事が起こってしまった。

スーツを着た男が病室に入ってきた。

厳しい顔付きで歩くその足取りからは音が立たない。

怪我人や見舞いに来た人たちと比べると、その雰囲気はいささか場違いなように思った。

何か違和感がある。

ドアを開けて入ってきた男に、俺以外は誰も反応していない、の

か？

こちらに歩いて来るということもあつて横目で観察して……眼が合った。薄笑いを返され、なぜか背中がゾクッと来たんだけども。

ところで俺はトラブル気質らしい。つまりこつこつ怪しい事柄には関わらない方が良くないに違いない。

よし、そうと決まれば星がクレイダナー、と冷や汗が止まらないもとい視線を窓の外へやった。

そついや昼だった。

「そう避けなくても良いだろう。別に取って喰おうとまでは思っていない」

現実逃避してたら例の彼がすぐ側だった。

……なんてこつた、俺に用事かね。

「えつと、貴方は？」

「私は羽間はみ 秋月あきつきだ。 真琴まことくん、君の親戚だよ」

自己紹介されてる最中なのに、俺を頭から爪先まで観察される。

しかも時が経つに連れて、羽間さんの顔から表情が無くなって来るんだが。

さつきから嫌な予感が大きくなってるんだけど、逃げられないかな？

無理か、無難に挨拶するか。

「はじめまして、羽間さん。お見舞いありがとうございます」

「はじめまして、今回は災難だったな。君のご両親にもご冥福を祈

ろっ」

「そうして頂けると助かります」

本当に。

俺の分までよろしく頼みたい。

感情の色が無い眼で見られてなければ、もっと素直に頼めただろう。これじゃ警戒心が先に湧いてしまう。

そう思っていると羽間さんが、さて、と話すと共に無表情から一転、笑顔になった。

「今日 来たのはお見舞い以外にも目的があつてね。率直に言ってしまうと真琴くんを引き取ることに決めたよ」

「……………は？」

まぬけな声だ。

いやうん仕方ない、内容が内容だ。

「あの、既に退院後は施設に行く予定になつてたはずですが」

「そこは大丈夫だ。君は何も心配しなくて良いよ」

いくら俺が子供とはいえ、選択肢すら与えられないのか。
しかもこのタイミング…………。

「ところで右腕を骨折してなければ本来はもう俺は退院してる頃なんです。何か来れない事情でもあつたんですか？」

「…………ほっ、私を疑うか？ まだ幼いというのに結構なことだな。

ふむ、案外 体だけじゃなく中身の方も歪なのかもしれんな」

一層 深まる羽間さんの笑みにゾワリと悪寒がッ。

え、なに、もしかして色々とバレかけてる？

いやさすがにそれはない……ないよね？

「中身とか歪とかよくわかりませんが、なんでまた俺の体が変わんて思っただんです？」

「鉄を握り潰すには160キロ以上の握力が必要とされているそう
だ。そんなことの出来る子供を普通とは呼びたくないな」

つまり握力計を握り潰したことバレてるんだな。

そういう意味じゃ俺はかなりのビックリ人間だろうけど、何の目的があつてそんなことを言い出したのか。

『下手したら解剖されてホルマリン漬けにされるかも』

なんで今 神様（自称）の言葉を思い出しちゃうんだ。

……どうして、かな。視界がぼやけて来たんだが。

それにやけに寒い、体が震える。

真面目に鬱んできてきた……冗談だよな？ 単に俺が想像力 豊
かっただけだよな。

「む、怖がらせてしまったか。いやしかし良い勘をしているな」

怖がったことを良い勘つて、え、冗談だろう。

こんなことで予知染みた直感 発揮しても仕方ないって！

「羽間さんは確が取って食おうとは思っていないと言っていましたよ

ね。あれ、嘘じゃないですよね？」

「別に取って喰おうとはしていないさ。仮にも親族だからな。……魔術師としては失格かもしれないが、まあ等価交換と思えばそう悪くない。つまり取引という訳だよ」

親族で良かった！

赤の他人だったらどうなった事か……！
で、それはそうと。

「……魔術師？」

「む、魔術師を知らないか。そちら側について親から聞かされなかったのだな。だが君は魔術の存在を否定できないと思うが？ 自身も鉄を握りつぶす程の異常を抱えてる訳だからな」

「そう言われると否定できませんけど……まさか本当にあるとは思いませんでした」

病室内を見渡せば相変わらずこちらに意識を向けない人達。まるで俺たちなんかいないかのような振る舞いだ。
これが魔術って奴なのかね。

「それで取引ってのは？」

「簡単な話だよ。魔術師から見て君の体は異常だ。それもすぐに解剖して中を見てみたくなる程度にはな。だからその体を危険のない範疇で調べさせて欲しい。もちろん調べた結果は君に教えるし、相応の見返りも用意しよう」

自分の体はある程度 把握しておきたい。
そう考えるとメリットですらあるのかな。

「それで見返りは？」

「先ほど話した通り、君の体は魔術師にとって魅力的だな。大抵の魔術師は躊躇せず解剖するだろう。さて、一生 魔術師に見付からず生活するのは難しいと思うがどうか？」

「判断材料は足りませんが……難しそうですね、やっぱ」

親族とは言え羽間さんには見付かってるし、トラブル体質らしいし。

「山奥に籠るなら別だがな、社会に紛れ生活するのは難しいだろうな」

「ということは、そこら辺が見返りの内容ですか？」

「そういうことだ。まず衣食住の保障は当然として、魔術師側の知識と理不尽へ抗う術を教えよう。どうだ、そう悪くない条件だと思うが？」

確かに、俺のデメリットが特にない事からも結構な大盤振る舞いだと思う。

親族用大サービスなのか、そんだけ俺の体が貴重なのか……それも嫌だな。

しかしまさか信用させておいて引き込んだ途端に豹変、なんてことはないよね。

羽間さんにとって不利益なことも明かしてくれたし、ある程度は

信用しても良いのかもしれないけど。

……そもそも拒否権あるのか？

まあ疑い過ぎても始まらないか。

「これからよろしく願いします、羽間さん」

「契約成立だな、こちらこそよろしく頼む」

そして人の悪そうな笑みを浮かべる羽間さん。あまりに似合っていた。

思わず早まったかも知れん、とか思ったのは秘密にしておこう。

1話 大災害の顛末（後書き）

初更新しました。

内容はF a t eにおける z e r o の終わりと s t a y n i g h t の始まりとも言える場面です。

第4次聖杯戦争の顛末の一つ、みたいな話でもありますね。

次回から主人公 少年期編です。

2話 魔術師の敷地へ

羽間さんとの遭遇より一週間、右腕が完治した。

お医者様は「あり得ん、あり得んぞ……」と唸っていたが、正直俺もそう思う。

あんな酷い怪我が僅か二週間で完治って、絶対に神様（自称）が何かしてるよ俺の体。いや感謝するけど。

そんな訳で退院して羽間家へ行くことになった。

手元にはありがたいことに羽間家までの地図。

何の因果か6歳児が一人で遠出するという状況が出来上がったらしい。

というのも『用事があつてしばらく遠出することになった。行き先は教えるから一人で行けんか？』と言われたのが事の発端だ。要するに行けるって言ったからこうなってる訳だけど、羽間さんもよく行かせる気になったな。実際 羽間家が見える所までは問題なく来れたけど。

というかなんだあの屋敷。

まだ二キロくらい先だが随分大きくないか？

しかしここまで長かった。

あの羽間亭だが緑溢れる山奥にあるのだ。

なんでもそこは優れた霊地だそうで、人気がない所も魔術の研究を気兼ねなく行えるという利点もあるのだとか。

お陰で寂れた山道を黙々と歩いてる所だけだね！

もう疲れたよ神様（自称）。

……… まあ何か反応があると嬉しかったけど、さすがに神様（自称）でもそれは無理か。

唯一の救いは荷物が少ないことかな。

中くらいのバッグ一つで充分だったからなー。私物は先の大災害で軒並み燃えたし。

子供の体力じゃそれすら重いという悲しい現実を突きつけられるけどね。さっきからバッグ掛けてる肩が痛い。

さてあと少し！ もう一頑張りだ！ と前を見たら犬と出会った。そして見詰め合う。

それはもう黒い犬だった。しかも2メートル越えてるんじゃないか？ 凄い大きさだ。迫力は満点と言っておこう。寧ろ狼なんじゃないかあれ。

俺の心臓が壊れたようにバクバク言ってる。心臓に悪そうだしもうちよつと静まって欲しいのだがどうにも静まる気配がない。

グルグルッ……と獰猛な牙を覗かせていらっしやるのが原因かもしれない。てか心なしか前傾姿勢になってない？

まずは刺激しないようにバッグを地面に降ろそう。

いざという時、そうあくまで『いざ』という時のために備えようと思ってたけど既に凄い勢いで犬が走って来てるね！ この勢いで体当たりとか洒落にならないからな！

バッグなんて放って、横に跳んで躲した！

黒犬がすぐ方向転換してまたも俺に突進してくる。

しかもさっきより速い！

咄嗟の横っ飛びで転がって辛うじて躲し、黒犬はその勢いのまま木に頭から激突した。メキメキって木が倒れる。ドスンッと地響き。

そして黒犬は何事もなかったかのように俺の方を向いた。

……俺 間違ってたよ。

これ犬じゃない。どっちかと言えば化物に分類されると思うんだ。

俺のトラブル気質も本物ってことだろうね。

さすがにここまでとは思わなかったよ、まったく困ったもんだ！

黒犬の突進をしゃがんで躲した！ 危なかった！

現実逃避してる場合じゃなかったよ！ 曲がりなりにもここまで避けれたの武術が天才級の恩恵なだけだからね！ それなかったら初手で血達磨だったからな！？

って危ないいい！ 掠った、今さっき爪が掠ったよ！？

……落ち着け。じゃないと本気で死ぬから。

まず冷静になって黒犬の姿を捉えよう。速過ぎて黒い線にしか見えないけど、動き自体は直線的で単調だ。

飛び掛ってきた所で体を捻って躲す！

よし、上手く出来た。

その調子で次も身を捻り躲す。無駄を極力省いた動きに最適化し躲す。その経験を基にさっき以上に無駄を省いて躲す！ その次も！ じゃないと一撃で持っていられる。それくらいのスペック差がある。でも拙い。疲れた。息が苦しいし足も重い。

子供の体力じゃさすがにきついよな。

つまり短期決戦しないと生き残れそうにないってことだろうけどッ！

動くのが遅れて黒犬の爪が掠め血が出る。その驚きと痛みで一瞬動きが鈍ったのが拙かった。突進してくる黒犬がもう目の前だ。これ、躲せないッ。

腕を交差させ無理やり地面を蹴って後ろに跳ぶ。次いで黒犬の突進の衝撃　ッやば、空中に投げ出された。しかも凄いい勢いで

景色が過ぎ去ってる！ 受身に失敗したら死ぬぞこれ！

近づく地面に合わせて体を捻ろうとするけど動かし辛い。あと痛

い。けどそんなことで諦めて良いことでもないッ！

両手両足で着地し勢いに流され馬鹿みたいに転がった。止まった頃には体中が擦り傷だらけで痛くて……あと黒犬がすぐ側だ。

「……うあ」

前足で踏み潰される。

息が辛い、たかだか前足が理不尽に重い。

そりゃ6歳の子供と2メートル以上の巨犬じゃそうなるな。捕まったら動かすことなんて出来やしない。

黒犬の顔が近づく。黒犬の息遣いさえわかるくらいに。そして黒犬の口が大きく開かれ、ずらりと並んだ牙を覗かせる。

口元だけで嗤ってやった。

本当に運が良い。

わざわざ動きを止めて、俺の手の届く範囲で止まってくれるなんて最高だ。

左手を硬く握り、上限なんて踏み倒して近付いてくる黒犬の顔面へ拳を振り抜く！

嫌な感触に不快な音、次いで黒犬が宙を舞ってるのが見えた。

血を撒き散らし、壊れた顔を晒す。そしてグシャリと音を経て地に落ちた。

あれはもう駄目だろう。動くが心配ない。

そもそもあれで動くなったらきつとアンデッドの類だぞ。…

…そういうの居そうで嫌だなあ。

ともかくしばらくは呼吸を整えよう。

今起きるのはさすがにきつい。

てか本当に疲れた！死ぬかと思った！もう動きたくない！

ああそれにしても左腕が痛いよー。う、あり得ない方向に腕が曲がってる。拳なんて骨が見え隠れしてる。でもこれ思ったより痛みがないんだけど。明らかに麻痺してるよな、腕の感覚おかしいし。

……気にしないことにしよう、うん。

まずは立ち上がってと。

この山道を引き返すには……遅いか、進み過ぎてる。それより羽間さんの家を目指した方が良さそうだ。羽間さんは居なくとも誰かしら居るだろうって言ってたし。

ともかく早く腕の治療してもらわないと。

けっこう痛いし麻痺してるからこのまま放っておくのは

「メザリアッ！」

声がしたからそちらを見る。

山道の先に女の子が覚束ない足取り歩いて来ていた。

見るに歳は俺とそんなに変わらなさそうだ。とりあえず背の高さは同じくらい。

それより顔色が悪いし息が荒い。汗の量も凄い。コホッコホ、と咳もしてる。あまり大丈夫そうには見えないけど。

「……メザ、リア？」

目が黒犬の方に行ってるんだよな。

これは、つまり、その。

女の子が軽く絶望した表情してるんだけども。

あ、俺の方を向いてきた。しかも親の仇みたいに睨んで来てる。

「あんたが……コホッ、メザリアを、殺したの？」

やっぱりその、メザリアってのは黒犬のことなんだよな。

「……そうだね、殺したのは俺だよ。でも先に襲ってきたのはそのメザリアで、無抵抗じゃこつちが殺されてたから。殺してしまったのは謝るしかないけど……ごめん」

「そっか、よくわかった」

こほつと咳をまた一つ。体調悪そうだ。

大丈夫か心配だけど、雰囲気が最悪というか……。

「なら、あんたが死ねば良かったってことね」

女の子がポケットから取り出したものがナイフという時点で、かなり拙い方向に事態が転がってる気がするんだ。

しかも俺に近寄ってくるその歩き方が妙に堂に入ってる。武術が天才級特典でそういうのなんとなく解かるようになってるがために間違いようもない。

これ絶対に悪意ある。いや言動からして普通に殺意ありそう。逃げれるかな。後ろに全力疾走で戻ればなんとか……。

「I want to disappear（私は消えてしまいたい）」

……なっ！？ え、消えた。

眼を逸らした訳でもないし注意を外した訳でもないのか！？

いや落ち着いてまず彼女を探し

眼と鼻の先にいて、ナイ

フが横腹に突き刺さっていた。

「ッ！？」

地面蹴って思い切り後ろに跳ぶ。

足が軋んだり、横腹の出血が酷かったりするが気にしてられない。彼女が追撃してくるからだ。それも有り得ない程の前傾姿勢で、上限を超えての跳躍をした俺より速く！

悪夢染みた速度でナイフが突き出される。その軌道を視れたのは本当に奇跡的で一種の火事場の馬鹿力みたいなものかもしれない。そしてただ必死に足を伸ばし、木を蹴ってナイフの刺突を回避できたのは出来過ぎと言って良いくらいだった。

受身は碌にできなかった。痛みで呼吸が途切れるし、衝撃で出た血を見るだけで眩暈を起こしそう。けど立ち上がる。

さつき無茶した左足が痛む。骨にヒビくらいは入ってそうだ。

それよりあの女の子は……思い切り蹲って咳き込んでる。もはや俺に構ってる場合じゃないくらいに咳が酷いけど。て血を吐いてないか！？ 手が真っ赤だぞ！

「大丈夫……な訳ないか。それで立てるのか？」

返事が憎しみ塗れな眼だった。

けど咳と吐血でそれ以上何も出来ない状態らしい。

携帯電話があれば救急車でも呼んで他の人任せにできるんだけど。

容態は素人目の判断じゃ深刻そう。

少なくとも放っては置けない。

思い切って近寄り、彼女の手からナイフを奪い取る。簡単に奪い取れたのだからやっぱり相当弱ってるんだろう。

彼女を持ち上げ、肩に乗つけて歩き始めた。

左手が無事ならこんな酷い運び方じゃなく、お姫様抱っこも出来ただけど…… ってうわ、暴れんな！

それで羽間家まではあと一キロくらいか。

辛いな、横腹からは問答無用で血が出てるし、左腕はもはや壊れてる。左足が地面に着くと声が出そうになって、肩に乗っけてる女の子の抵抗で心身はガリガリ削られ中。

なんだか目がちかちかしてきたんだが。

もう過度のストレスでやられたか。いや単純に出血多量なだけの気がするけど。

それにしてもこの女の子、来た方向的に羽間さんの関係者かな。やっぱそうだよなー。拙いよなー。

…… 完全犯罪して知らぬ存ぜぬで通す？

一から十まで冗談だけど。

彼女はその、良いと思うし。

あの黒犬　メザリアだっけ。メザリアを想って行動できる所とか本当に良いと思う。俺も両親失くしたけどあんまり想う事なんて多くないからなー。

だから俺は多分きつと、この女の子は割と死なせたくないんじゃないかと思わなくもない。それ以前に人として助けるべきだろ普通。という考えが大きいのも事実なので助けてるだけかもしれないが。

しかし異様に寒いね。

力も入らないし。

蜃気楼が見え始めるし。

けどなんとか辿り着いた…… 羽間の屋敷、近くで見るとやたら大きいな。

震える指先でインターホンを鳴らす。

誰か居るだろ。ここまで来て誰も居ないなんて無しだからな。

……意識保つのも辛いんだけどな。中々出てこない。

まあいいや、どちらにせよこれ以上は無理だ。さすがにもう限界

2話 魔術師の敷地へ（後書き）

初バトルパートです。

そしていきなり満身創痍です。

しかも自傷率が高い。多分 自傷率ではかなり上位の主人公でしょうね。

あと出会い方って重要だね、という話でもありました。もちろん今回の出会い方はこれからも尾を引いていきます。

それではここら辺で失礼させていただきます。

3話 魔術を学ぼう

相変わらずこの世界は白一色だ。

そして此処に居るのは俺と神様を自称したあの女の子だけ。

前と違う所と言えば、体が動かなくて感触もなく声も出ない所。

あとは俺が子供な状態な所か。女の子を見上げなきゃいけないという状況だし。

彼女も前と変わりなくあまり特徴ないけど可愛らしい。黒髪のセミロングで黒い目に肌の色は平均よりやや白めと言った所……もしかして日本生まれか？

そいつがどうしてか困ったような表情で見下ろしてくる。一体どうしたのか聞いてみたいけど声がでないからどうしようもないんだが。

「いつかは此処に来たのだとしても……ちょっと早過ぎだよ」

そんなこと言われても。

どうやってこの世界に来たのかもわからないんだけど。

でも状況的に考えて、もしかしてまた死んだ？

それはなんとまあ、短い人生だったね。

神様（自称）もため息吐いてる。

そりゃ蘇生させてすぐ死んじやったら呆れるか。俺としても申し訳ない。

ま、やっちゃったものは仕方ないか。それより羽間さんの関係者らしきあの女の子は大丈夫なのかな。これで共倒れだったら頑張った甲斐がないんだが。

「あの女の子なら心配ないよ。それに君だって死なない」

そっか、なら良かった。

……………。

読心されてーら。さすが神様（自称）、基本的人権なプライバシー保護など容易く踏み潰してきやがる！

……まあ声出ないんだから仕方ないんだろう。あまり良い気はしないけど、意思疎通できないんだから贅沢は言えない、か。

「ごめんね。本当はあまりやりたくはないんだけど……って、これじゃただの言い訳だね。本当にごめん。でも、今の内に言っておくね。君のプライバシーなんて今までも、そしてこれからもない。私は君がその生涯を終えるまで見続ける。例え嫌がったとしても、真琴が私を恨んでも、最後まで見届けるのを止めない、と思う」

……………。

言いたいことは色々あるが声が出ない。それに絶賛不安そうな顔で見詰められてるんだけど、そんな顔されると言いたいことすら消えて行く。

消えた内容は、それ言わなければ良かったんじゃないか？ 知らなければ視てようが視てなかるうが俺には同じなんだから。とか思っただけけど、とは言え思った瞬間にそんな言わなきゃ良かったという顔されても困るんだが。

えーと、つまりこっいうことなんだろ。

結論、言葉には気をつけましょう。

「……はい」

しゅん、と子犬のような反応。

何やらせてんだろう俺……というより何 反応してんだよ神様（自称）……………。

でも実際そこまで気にしなくて良いと思う。

『俺』を蘇生させたのは彼女だ。それに大災害で俺が死ななかったのだってきつと彼女のお陰だ。ならこの俺の一生分くらいは彼女が全部好きに使ったとしても構わない、ような気がしないでもない……あんまり無茶なこと言われなければ。

まあ、良いんじゃないか、別に？ 自分の蘇生させた人間の一生涯なんだ。気になるのはそう不思議とは思わない。さすがに風呂とかトイレとかを覗かれるのは嫌だけ………何故そこで顔が強張る朱くなる。

「えと、大丈夫だよ？ 心配ないからね」

……今の俺は6歳児だからね。ていうか年齢不詳な神様（自称）のあんたが反応するような場面はなかったと思うしそう信じたいよ？ あと俺の神様像の崩壊が止まらないんだけど。

「とにかく！ もうここには来ちゃ駄目だからね！ わかった！？」

どうやって此处に来るのか解らんが解ったから落ち付いて欲しい。てか暗くなつて来たね。話を打ち切る気満々だね！ いくら恥ずかしかったからってそれで話を打ち切

そして見覚えのある病室に目覚めるのですた。

……本当にやりやがったよ。しかもまた入院生活か。

今回は十日程で退院となった。

ちなみに左腕 重複骨折、左足 不全骨折、横腹 7針縫う等々の大怪我が九日で全治だったね。お医者様からはマネキンの様な笑顔（諦観の境地）で「退院おめでとう」と言ってたぞ……。

何故だろう。入院してるだけなのに常識崩してごめんなさい、と謝りたくなってくる。

退院後は羽間さんにホテルへ連れて行かれた。

その道中は基本的に気まずい沈黙だったりした。具体的には羽間さんの表情が硬くて迂闊なことと言えない雰囲気だったんだよ。

それで、ホテル室内に入って早々 荷物を置いて羽間さんと同じ合う事になったんだけど。

「事情が変わってな。真琴くんをしばらく親戚の所へ預けることにした」

予想はしてたけど、あまり良い話じゃないみたいだ。

「あの女の子、ですか？」

「……そうだ。私の娘でな、体の調子は回復したが情緒が不安定なんだ。今 真琴くんと会わせればまた襲いかかりかねない。あの娘を家まで運んでくれた君にこんなことを言うのは心苦しいが、落ち着くまで待つてくれんか」

「それは、俺にも責任がありますね。あの犬のことはすいませんでした」

「いや、あれは私の落ち度だ。あの魔犬は大人しい気質で、人を襲

うことはないと思っていたのだが……君には申し訳ないことをした。よく生き延びてくれたな」

いえ、と断わりを入れる。

こつちも悪いのだからあまり言えることは無いよな。

それにあの娘が無事なのは良かった。

入院中は羽間さんと会えなかったから、彼女がどうなったのか気になってたんだ。

とはいえ彼女には随分と嫌われちゃってるみたいだけど。

仕方ないのかな。大切に思ってたであろう犬を殺したんだから。

……にしても、命あるモノを殺したのにそれほど思う所がないなんて。人の形をしてなかったから、なのかなあ。

「ところで俺が預けられる親戚のことを聞いても良いですか？」

「七夜の里という所に預けるつもりだ。七夜という一族は退魔を職業としていてな、裏の事情や荒事への対処法も学べるだろう。それに君の母親の故郷でもある」

「母さんの故郷ですか……」

七夜の里のことなんて始めて知ったな。

記憶の中にある母さんは、優しくて温和でお人好しだ。そんな彼女が生まれ育った場所ってのは、なんとなく見てみたい気がする。

「でもホテルに寄ったという事は、すぐに七夜の里に行く訳じゃないんですね」

「そうだな、これから真琴くんには魔術を学んでもらう。七夜の里に行くまでの一週間程だな」

「一週間 魔術を学ぶ、ですか。すみません、それは嬉しいんですが、娘さんの方は良いんですか？ 情緒不安定という事ですし、彼女に着いて上げた方が良いのでは？」

「……あれから十日も経つからな、多少は安定してきているさ。それに真琴くんは早く魔術師になつてもらわねばなんのだよ。詳しくは後で説明するが、今の状態では無用な厄介事を引き寄せかねからな」

俺のため、か。

ただでさえ俺が原因で厄介な事件が起こったのに申し訳ない。

「これから一週間、よろしく願います」

「任せよう。一週間しかないゆえ早足で行かせてもらうぞ？ ああそれから私の教えを受ける以上、君は羽間の魔術師だ。丁度手続きも完了した。これからは羽間 真琴と名乗ると良い」

「はい、わかりまし……え？」

いつの間にか羽間家の養子になってたことが判明した。さすがに困惑して驚いたよ。

お陰で羽間さん改め秋月さんによる魔術議論の内容がちよつとあやふやだ。

あー確か、魔術師はまず死を受け入れなければならぬとかなん

とか……あれ、何気に重要そうじゃない？

待て、必死で思い出そう。

そう、本来なら死を受け入れる所から始めなければならない。だが俺の場合は特例で、魔術師になり自身の体を御せなければ災厄を引き寄せるだろう。故に選択肢などもはや無く、魔術師になる以外に道はない。

確かそんな感じの内容だったよね。

神様（自称）……俺の平穩は遠そうだよ。

そして秋月さんの魔術議論はまだまだ続く。

なんでも魔術師になるためには、魔力を流すための魔術回路なるものを作る必要があるんだそう。それで魔術回路は最初 擬似神経として眠っているんだと。それを起こし魔術回路を一度作るとあとはスイッチみたくオン・オフできるらしい。

ちなみに調べた結果、俺はもう魔術回路が出来上がってる模様。

総数9本。初代にしてはそれなりに多い方だそう。

ただ問題はあるようで。

「真琴の魔術回路は全て常時オンの状態だな。それも9本しかないと考えれば垂れ流し所ではない程の魔力量を流出している。普通このようなことを続ければ魔力の枯渇はおるか、生命力を使い果たした拳句 死に至るはずなのだがな」

訂正、大問題があるようだ。

なおこれが一目見ただけで異常と解かる原因でもあるらしい。

これも魔力が無尽蔵って特典の弊害なのかなあ……。

その後は詳細を調べる為に俺は上半身裸になってベッドに仰向けにさせられた。そして秋月さんは俺の体を触診みたいなことしたり呪文らしき言葉を呟いたりしていた。

そして時間が経ち、調査が一段落した。

再び秋月さんに対面する。しかもさっきからなんだか顔が怖い。なんだ、もしかしてとんでもない事実でも発覚してしまったのか。

「……真琴のことは異常だ異常だとは思っていたが、想像以上だったぞ。君の魔術回路は根源の渦にも似たどこかに繋がっている」

なるほど、それはおかしい……んだよね？

先の魔術講座の記憶によると、魔術回路つてのは外界の大源^{マナ}を体内に取り込んだり、内界の小源^{オト}と呼ばれる体内で生成した魔力を流すためのものだそうだ。ここに根源の渦なんて単語はどこにも出てきていない。

つまりだ。

「その根源の渦って何ですか？」

知識不足の俺が異常とか判断できる訳ないんだよね。

一人前の魔術師への道程は長く険しいな。そも初代の魔術師で一人前になるには普通十年単位の研鑽が必要だそうだから一生無理な気がしないでもない。

「根源の渦、起源の渦、アカシックレコード、神の座、真理。呼ばれ方は様々だが、要はこの世の全てが始り、そして終わる場所だ。我々 魔術師が全人生を賭けて目指すべき到達点でもある」

なんだか凄そうだ。

しかもその根源の渦に似たどこかに俺の魔術回路は繋がってるのか。繋げたの神様（自称）なんだろうな。神の座なんてものに近い場所に繋がってる訳だし。

もしかして俺がそれに至ればまた神様（自称）に会えるのか？

あーでもあの白い世界にはもう来ると言われてたね。あの場所が根源の渦なのかはわからないけど。

「それで根源の渦に到達したら何が出来るんです？」

「さて、至った者はこちら側に帰って来んという話だからな。だがもし戻って来れたなら、魔法という奇跡を持ち帰ることが出来るぞうだ」

魔法って、魔術と何か違うの？ という疑問は後に続いた魔術議論で解消された。

要約すると魔術は現代科学で可能な事で、魔法は現代科学では到底 不可能な奇跡を起す代物だそうだ。そして魔法に至った者を魔法使いと呼ぶらしい。

ちなみに現存する魔法は5つしかなく、魔法使いもまた5人しか居ないとのこと。

更に余談で第2魔法は『平行世界の運用』、第3魔法は『魂の物質化』…… と思い切り俺の体ってその奇跡を体験済みじゃないだろうか。

これまでの魔術講座により、普通の魔術師は研究のために必要ならば非人道的なことも容易くやると学習しましたので…… これは、そりゃ狙われるわ。

魔術を教えてくれるのが秋月さんで本当に良かったよ。必要なら身内でも手を出すのが魔術師らしいからね。

秋月さんが俺を解剖とかしない理由として『私は魔術師として3流の落ちこぼれだからな』とかあるらしいが、人としてならむしろ尊敬の対象だね！

「……」とここまでは魔術回路を言及してきたが、肉体面も中々に理

不尽だ」

「理不尽ですか」

「異端と呼べる程度にはな。起源覚醒や概念の上書きではなく肉体への純粹な概念付加、魔術でのそれは高等な大魔術だ。それも肉体機能を一切損なう事なく達成するなど、馬鹿げてるというか言い様がない」

話を聞くに、どうも人を外れず肉体に概念を付与させるのは相当難しいようだ。生まれ持った肉体の容量限界を超えないようにするためには、本来なら付加ではなく上書きや一部肉体機能を削り取らなければならぬ。付加するにしても魔術で無理やり固定するか人を捨てるかしないといけないようだ。俺の場合は暴力の概念が人のまま完全に体の一部として付加されてるんだとか。

まあ一種の異能と思えば良いらしい。

「現状調べられる範囲ではここまでか。とはいえ、まだ何かあるはずだ。真琴の並外れた再生能力も不明な点が多いからな。私が思うに脳や魂辺りも怪しいだろう。そちらは専門ではないから次の機会だな」

わはー、再生や脳は知らないけど魂って完全にアウトだよな。

頼もしい反面、『俺』のことが露見しそうで少し怖い。別に何があっても秘密にしようとは思ってないけど、言わないでおける内は隠しとくつもりだからなー。

「さて長くなったがここからが本題だ。今から実際に魔術回路を制御してもらう」

秋月さんが荷物の中から小瓶を取り出し、俺に飲めと渡してきた。小瓶の液体、紫なんだが。飲む人に優しくない色だよな。あと腐ったナマモノの匂いがする。これを一気に飲め？ 遺書の準備した方が良いか？ …… 渡す奴が居ないか。

躊躇った所で遅いか速いかの違いしかない。諦めて飲もう。

……………！？

マズ！ いくらなんでもマズ過ぎだろ！

くそう、一気に流し込むしかないじゃないか！

あ、涙出てきた。この歳になって涙もろくなってきたね！

どうでもいいなそんなこと！

「み、水を！」

「安心しろ、不味いのは最初だけだ」

それ諦めろってことか！

絶望しろと、諦観しろと、地獄に落ちろと言いたい訳

あ、

ちよっと待ってヤバイ。胃酸が這い上がる。

んぐ、んう…………… はあ、落ち着いた。

そんな俺を無視して俺に向けて呪文唱えてた秋月さん。これは睨んでしまっても構わないんだろうか。我慢するけど。涙目で睨んだ所で格好すらかないからね…………。

それよりも体の調子が変わったことを気にするべきかな。

秋月さんの魔術で何かされたんだろうか。

「どうだ？ どこかに違和感を感じ取ることはできるか？」

「体に違和感がありますね。今まであった何かが欠けてるような感

じがします」

「ほう、それは良いことだ。真琴の魔術回路を閉じさせてもらったが、感じ取れることはできてるようだな。では起動できるか試してみてくれ」

起動ね。その前にまず魔術回路とやらを把握しないと。

体内の損失感に意識を向けて、それを認識する。体の動作認識は冬木の大災害以来の得意分野だ。

目を瞑って体内に埋没。

魔術回路と思われる神経系を確認する。

脳から心臓にかけて伸びる回路、胴体から右腕に伸びる回路、横腹から左腕に伸びる回路、胴体から下半身に伸びる回路……以下省略。全魔術回路9本を認識。

あとは起動させるだけ。

神経に電気を流す。青白い放電現象を起こさせながら。

そんな想像が頭に浮び、^{イメージ}魔術回路が起動した。魔力だろっ欠けていたそれが体に満ちていく。

「……呆れたものだ。魔術回路を起動させるとは言ったが、本当に起動できるとは思わなかったぞ」

普通に出来ることじゃなかったんだ。

「本来なら魔術回路の起動にどれくらい時間を掛ける予定だったんです？」

「予定では今日1日を使って魔術回路を認識し、明日中に起動まで

持つていくつもりだった。本当に惜しい逸材だな……魔術回路がせめて並の魔術師程度でもあれば大成する器だったかもしれない」

それは遠まわしに魔術回路少な過ぎて宝の持ち腐れと言ってるんだろうか。

……まるで言い返せないな。魔力が無尽蔵って特権も魔術回路が少ないから瞬間魔力量が少なかったため十全に使えないって話だし。俺くらい瞬間魔力量に制限が掛かると大魔術は難しいらしいし。

「魔術回路を起動させた時に何かイメージが浮んだな？ あれは魔術回路を起動させるトリガーになる。自分の起動イメージをよく覚えておけよ」

魔術回路の起動イメージか。

そういえば起動のとき、神経に電気を流すイメージが浮んだな。

「しかしその魔力放出量はまだ少し抑えられんのか。瞬間的なものならまだしも、常時その放出量では魔術回路への負担も大きいだろう」

「そうなんですか？ 負担が掛かってるって意識はなかったんですか」

「……そうか、ならまあいい。だが普段は魔術回路を閉じておけよ。他の魔術師に眼を付けられたいなら別だがな」

皮肉を言われるくらい異端的なことだったのかー。

そうだよな、俺の体って神様（自称）に弄り回されてるもんね。気を付けよ。魔術師は基本マッドサイエンスと聞くと、魔術師怖い理念で行こうじゃないか。

ところで魔術回路の停止ってどうするんだ？ 起動トリガーの反対を想像すれば良いのかな。こう神経に電気流すのを止める感じで…… あ、できた。全魔術回路を閉口、と。

「さて、これでようやく魔術師としての下地が出来た訳だ。次は実際に魔術を扱ってもらうぞ。まずは、そうだな…… 暴力の概念を扱い切るためには肉体強化は必須だ。七夜の里に行く前には何らかの肉体強化魔術は扱えるようになってもらう。ではさっそく魔術の講義を始めようか」

そして長い魔術講義が始まった。

経験の前に知識を詰め込むんだそうだ。

さすが魔術と言う名の学問だけあって覚えなければならぬ事は膨大だ。そんな魔術議論は日が落ちるまで続く。というのは間違いで、日が落ちても続く。

長い一日になりそうね……。

強化の魔術。一言でそう言ってもその種類は多岐に渡る。大別するだけで肉体強化、物体強化、概念強化と3種類に別けられる。より細かく種類を別けることも可能だ。

俺の習得した強化は大別において肉体強化と物体強化が出来た。対象を解析し、対象の材質の隙間に魔力を流し、補強という形で耐久性を引き上げる。

これが強化の中では比較的 適正の高い魔術だった。

手の中にある新品の鉛筆を強化する。

もう何十と行った魔術の実践だ。
見守っている秋月さんの視線に緊張感が高まる。

「a p p r e h e n s i o n（捕捉）」

魔術の呪文とは自己暗示。だからこそ同じ魔術でも使う者によって呪文の内容は変わってくるそうだ。呪文とは内から出てくる言葉で、俺もそれは同様だった。
それをもって鉛筆を解析する。

「r e i n f o r c e（補強）」

材質の隙間に魔力を流し込む。
強化の魔術により、この鉛筆は鉄に匹敵する硬度になった。
少しくらい力を入れた程度でボキッ。

「……………」

「……………」

折れない筈でした。

そりゃ鉄を折ることも出来るけど、好き好んで折ろうとは思わない。つまり鉛筆強化成功率は見事に0%なのだよ。何十回やって一度すら成功してないんだよ！

一流の魔術師への道のりは果てなく永そうだな……………。

「低級の強化魔術に苦戦か。属性や適正によって偏りが出るのもわかるが、それを踏まえても魔術の才能があるとは言い難いな」

「その様ですね……………痛いほど身に染みてます」

武術は天才級なだけだな。
貰い物だけだ。

「仕方ない、次だ。右手に肉体強化を施してみろ」

これも何十回やったなあ。

基本的に同じ工程で行う魔術だが、難易度は肉体強化の方が高いらしい。物体は原子の集合体だが肉体は細胞の集合体だ。その違いが難易度の違いだそうだ。

俺にはあまり関係ないが。

ともかく目を瞑り自分の体を把握する。

「r e i n f o r c e（補強）」

解析魔術の必要はない。

体の把握は得意分野だ。

魔力を適所に流していく。

「……出来ました」

強化を施した右手を差し出す。

秋月さんに右手を触診された。

「ふむ、成功か。相変わらず肉体関連には強いようだな」

「そうですね。それに得意なのが肉体関連で良かったと思いますよ。肉体の耐久性が上がれば体の可動限界も上がるので、七夜の里に行くならそっちの方が助かります」

何せ聞いた話じゃ七夜の体術なるものは人間離れした動きをする
そうだ。

さすがに七夜の体術を使う度に肉離れやら骨折やらなるのは嫌だ
からね。

それにしても、これで魔術の最終確認も終わりか。秋月さんの魔
術抗議も一先ず終了。あの魔術抗議から開放されるとなると嬉しい
ような寂しいようになって感じだね。

「真琴を七夜の里へ預けるのもいよいよ明日だな」

「あれから一週間。凄く長かったですね……」

「それだけ充実した、内容の濃い1週間だったということだろう？
良いことじゃないか」

「ええそれはもう内容の濃い一週間でした。辛かったこと、苦しか
ったこと、不味かった液体処理の思い出は全て鮮明に思い出せます」

「ほう、どうやら私は真琴に輝かしい思い出を残せたようだ。それ
でこそ魔術を教えた甲斐があると言うものだ。私の残したかった
想いだよそれは」

「魔術とは何か、辛く苦しくそして死に続ける碌でもない技術であ
る。その教え、俺の中に一生涯 刻み付けましょう」

「その通りだ。魔術なんて学問は碌なもんじゃない。それを扱う我
々魔術師も碌でなしの集団だ。我らは真つ当などからは程遠い最低
の人でなし達だ」

「そんな最低で最悪な技術を教えてくださりありがとうございます。」

お陰で俺は自分の身を守る術を手に入れることが出来ました」

「クク、護身用に魔術を学ぶなど正当な魔術師ではないな。だがそれで良い、邪道でこそ羽間の魔術師だ」

「貴方が師で良かった。この一週間、お世話になりました」

紛れも無い本心から深々と頭を下げた。

魔術師でいながら魔術師らしくないと言う秋月さんが師でなければ、魔術が身を守る術などと言葉に出来なかったかもしれない。何せ魔術の本質は学問であり根源へ至ること。護身用という使い方が正当でないにも程がある。

だが羽間の魔術師は正当ではない。

学び極める魔術師より扱い極める魔術使を。

王道をもって根源に至らず、異端をもって外側へ至ろう。

故に、羽間は魔術師として邪道で3流の落ちこぼれである。

その理念が丁度俺に合っていた。

だから胸を張って声高らかに宣言できる。

羽間 真琴は魔術師であると。

3話 魔術を学ぼう（後書き）

魔術の説明って難しいですね。

思わず端折りに端折って飛ばしてしまいました。

魔術論は書くの苦しかったですよ。無事（？）に終わって良かったです。

次回から七夜編です。

4話 七夜の里入り（前書き）

母さんが笑顔で言った。眼が気味悪いわね。

父さんが笑顔で言った。見るなよ気分が悪くなる。

隣のおばさんが笑顔で言った。どうしてこんな娘が生まれてきてしまったのかねえ。

隣のおじさんが笑顔で言った。居なくなってくれば安心なんじやが。

近所の女の子が笑顔で言った。ねえどうして生まれてきたの？

近所の男の子が笑顔で言った。ねえどうして居なくならないの？

怖くて震えて泣いた。

皆の責める声は止まらない。

大切なモノが崩れていく。

しばらくして皆から笑顔が消えた。

世界が綺麗だなんて、嘘っぱちだ。

4話 七夜の里入り

秋月さんと共に電車で移動し、タクシーで山を登った。そこで秋月さんと別れ和服のお姉さん、七夜 瑞希さんへと案内人が代わる。その人と森の中の山道を延々と歩き続け、日が落ちてきた頃に開けた場所に出た。

そこが通称、七夜の里。

森に囲まれ、木材の家が幾つか点在し、見える人の全てが和服姿。

ここはいつの時代だよ！？

突っ込んでも仕方なかったと思う。

なお瑞希さん曰く、七夜にとつて和服はデフォルトとのこと。

そして木材で建てられた家に連れて来られた。ここが今日から俺の住む家になるそう。という訳で瑞希さんと一緒に家に入る。

そう瑞希さんも一緒なんだ。この家の住人構成は父、母、姉、妹の四人だそうで、瑞希さんは長女に当るらしい。

なお両親は里の外に出張中とのこと。最近忙しそうなんだって。

……忙しい内容が暗殺だとしたら色々と言葉に悩む所だ。

七夜って混血に対する暗殺集団らしいし。

部屋を与えられたので荷物を置き、軽く整理をしていて愕然とした。

電化製品が……碌にない。

精々部屋の明りを提供する蛍光灯くらいしかない。

早くも挫折そう。

部屋の中にある物って、木製の机に木製のタンスくらいだからね。そして床ではなく畳みである。ベッドすらなく布団である。テレ

ビすらなくラジオもない。新聞はあるらしいけどさ。
住めば都とは言うが、慣れるまでは時間が掛かりそうだ。

子供の順応性は偉大だね。この家に慣れたとまでは言わないまでも、2時間もすれば違和感がもう薄れてきてる。

その頃にはもう夕食時だ。広い和室に呼ばれて行くと、ちゃぶ台には和食中心の料理が並んでいた。

具体的にはご飯に焼き魚、味噌汁に肉じゃがだ。
見た目 美味しそう。

「この料理、瑞希さんが作ったんですか？」

瑞希さんは14歳らしいけど、その歳でもうこんな料理作れるなんて凄いなーと思って聞いてみたら不機嫌な顔になった。

え、俺なんかした？

「またもや敬語とは良い度胸ねえ……」

そしてニヤリと笑って白い歯を見せ付けるのです。

うん、自然に敬語になってたね。

子供らしくない、禁止！ と言われてたのがすっかり忘却の彼方だったよ。でも良い度胸ねって子供に言う言葉じゃないと思うんだ。

「……この料理、瑞希さんが作ったの？」

「それでよろしい！」

料理を作ったのは私よ。両親がいないときも間々あったから、自ずと料理ができる様になっちゃってね」

この家の両親は放任主義なのかな。でも親がよく居なくなるってあまり良い環境とは思えないんだが。

いやでも、そのおかげで子供が逞しく育ってるのか。

それに子育ての経験のない……ないよね？ な俺が人様に口出しするのは傲慢だよ。今はただ料理できる瑞希さんを尊敬しようじゃないか。

料理作れるのは本当に素晴らしい。

「瑞希さん、俺に料理を教えてくださいませんか」

「良いけど、料理を食べもしないで決めて良いの？」

……駄目ですね。俺は一体 何歩 先走ってるんだろう。

でも今までが病人食ばっかだったから仕方なかったんだ。ホテルの食事は美味しかったけど、魔術の鍛錬に集中してたから食事抜かすこともあったし食事あまり恵まれなかった。

だから俺は決心したんだ。料理のできる人間になろうと！

でもいきなり教えては早計だったかとも思わなくも無い。

「なら明日から一緒に料理を作らせて欲しい、つてのは駄目かな」

「まあ真琴くんが手伝ってくれるなら歓迎するわよ」

ノリ気じゃなさそうだけど、とりあえずOKは貰えた。

良かった。料理くらい作れないとこの先 食事に苦労しそうだったからな。両親ももう居ないし、この先いつまでも羽間や七夜、親

戚の皆に甘え続ける訳にも行かない。そう思えば一人暮らしする日も遠くはないだろう。

生きる上で食事というのは大事だ。同じように料理だって重用だから料理を学べる機会があるのは幸運だったな。

「さて、話もまとまったことだしいただきますしよっか！」

「うん、そうだね」

普通に返事した、けどなんか忘れてる様な……あ。

「その前に、確か妹さんが居るんだよね？ 俺はまだ会ってないけど、もしかして妹さんは今日 家にいないの？」

「居るわよ、その……あまり部屋から出ないけど」

えと、引き籠もってるの？

しかも瑞希さんが浮かない顔してる所から察するに、あまり良くない理由……なのかな。

特に家じゃなくて部屋から出てこないのが気になるね。今回が特別って訳でもなさそうだけど、家族とすら一緒に食事をしない理由ってなんだろう。

気になるけど会って数時間程度の俺が聞いて良いことが悩むな。聞かなくても一緒に暮してれば自ずとわかることかもしれないし。

「でもそうね、良い機会だから沙希に料理を渡しに行ってくれない？ 顔合わせにもなるし丁度良いと思うのよ。沙希の部屋は廊下の一番奥にあるんだけど、頼んでも良いかしら？」

「それくらいなら頼まれるよ」

「そう、ありがとう。今 料理を持って来るから待っててね」

と言い残して瑞希さんは台所へ行った。しばらくして料理を載せたおぼんを持って戻ってくる。そのおぼんを渡され、いつてらっしゃいと。

予想はしてたけど瑞希さんは来ないんだね。

……少し期待してたのは内緒にしておこう。

とりあえず行ってみようか。部屋まで単純な道程だそうだし。

一人でおつかい中。

おつかいも何もないけど。所詮は家の中だし。

少し歩いた所でドアの行き止まりにつき当たった。

おそらく瑞希さんの妹さんが居ると思われる部屋の前だ。

とりあえずノックしよう。

コンコン。

……………。

返事がない。

中に居ないのか？

いや寝てるだけかもしれないか。

「すみません、沙希さん居ますか？」

呼んでみる。

返事はない。

むー、この部屋と思ったんだけど間違ってたか？

仕方ない。最後に一応 部屋の中を確認して、それで誰も居なかったら瑞希さんの所に戻るか。

ドアを開けてつと……ん、鍵は掛かってないみたいだな。

部屋の中は暗いけど、ざっと見た感じ………眼が、合った。

女の子だ。

暗くてよくは見えないが、俺より少し年上程度の女の子が部屋の壁に腰掛けてる。

そして、眼がおかしい。

眼が様々な色に移ろいながら淡く光り、不定形に蠢いている。

あまりに綺麗で毒々しい。ずっと見てると気分が悪くなりそうな色彩だ。

……魔眼って奴か？

それもノウブルカラー？

さすがに虹色とは違いそうだけど、上位の魔眼なのは確かだと思う。あんな毒彩色の魔眼なんて聞いた事ないけど、不思議と引き込まれる強い神秘性を感じる。

……気になるけどここまでにしておこう。

料理を運んでる訳だし。

「いきなりドアを開けちゃってごめんね。誰も居ないのかと思って」

「いいよ別に、気にしない。料理ならその机にでも置いてって」

「うん、わかった」

視線で示された机まで歩いて料理を置く。

それにしても暗くて歩き辛かったな。

なんで明り点けないんだろう。

「あと自己紹介するね。俺は羽間 真琴。今日からしばらくこの家にお世話になるんだ。よろしくね」

「七夜 沙希。私とよろしくしてくれるんだ。それは楽しみにしてるね」

そして意地の悪い笑顔を見せてくれる沙希ちゃん。

DSとまでは行かないまでも、けっこうSの素質があるのかもしれない。

激しく不安だ。

「エス……？ エスって、なに？」

「ああSってのは……」

待った。これ子供に教えて良い内容かな。

無理に隠すようなものではないだろうけど、あまり教えたいと思うものでもない。言葉を選んで無難な内容にまとめるか、えーと……

……………読心されてーら（2度目）。

またか、またなのか！

俺のプライバシーは何処に行っただよ！

「また、なんだ。へえ、私以外にもこんなの持つてる人がいるんだね」

あいつを人と言って良いのかはわからないけどね。

でも拙いな。心を読める相手には知られたくないことを簡単に知られてしまう。俺の場合だと、神様に会ったことや異世界に飛ばされたこと、そして第二魔法と第三魔法を体験してることを知られてしまいかねないってことだ。

「それは、なんて言うか、もはや呆れる内容だ。それ本当なの？

…… 本当なんだ。それはさすがに驚いたよ。でも知られちゃったね
ご愁傷様」

この楽しそうに笑ってる小悪魔をどうにかしちゃう魔術ってないかな。てか速攻でバレるって、暗示や洗脳の魔術なんて使えないぞ。記憶操作が出来ても使うのは御免だけだ。

「それ皆には秘密にしてるんだ。言わないでくれるか？」

「そうなんだー。でも秘密って言いふらすと楽しいんだよ？ その人にとって重要なら特に」

更に良い笑顔になってるよ。困った……。

言いふらされても内容が突飛だから嘘と切り捨てられそうなものだけだ。読心のできる人間の言葉ってのは真実味がありそうだし、魔術師に聞かなくてもしたら可能性があるってだけで実験する理由になる。頭が痛くなってくるな。

あー、あれだ。こうなったら毒喰らわば皿まで行ってしまうのか。具体的には極力 沙希ちゃんから離れないようにして、言われそうになったら無理やり止めちゃおうって感じの作戦で。難点は秘密が秒刻みでバレて、増えていきそうって所かな……。

「私と離れないようにねー。面白い発想だ。でも大丈夫？ 私と居

「てちゃんと耐えられるのかな」

「少なくとも今まさに出鼻を挫かれた所だよ……予定では、友達になるう？ から始めるはずだったのに」

「はあ、友達になろう。え、正気で？」

「失礼な、ちゃんと考えがあるんだぞ。ほら、友達なら側に居るのも自然じゃないか」

「それ言ったら台無しだね」

「言わなくても台無しだろうに」

沙希ちゃんがぐすくす笑った。

意地の悪い笑みじゃなく、普通に笑ってる。

会ってから初めてだな。もっと頻度高いと良いのに。

「うん、清々しい開き直り方だ。ならこうしよう？ 君が……いや、真琴が私の友達するのに耐えられる限り真琴の秘密を言わない。けど耐えられなくなった時は真琴の秘密を余さず暴露する。これでどう？」

「難易度が下がるのは喜ばしいね。それで行こう」

なんとか周囲に暴露されることは先延ばしにできたみたいだ。

一時はどうなるかと思った。

「それじゃお友達にも成れたことだし、俺は瑞希さん待たせてるから一旦戻るよ。沙希ちゃんはどうする？」

「此処で食べる。行く理由もないから」

「そっか、ならまた後で食器下げに来るな」

食事くらい家族で出来れば良いのに、と思っても言葉には出来なかった。

隠し事が筒抜けになるのは誰しも嫌なんだ。だから、もしかしたら、間違いであつたら良いんだけど、瑞希さんは沙希ちゃんと一緒にいるのが嫌だっと思ってるかもしれない。

そうなら無理に沙希ちゃんを連れて行っても息苦しいだけかもしれないし。ここはもう少し様子を見ようと思う。

「ねえ真琴、行く前に一つだけ聞かせて？」

「ん、なんだよ」

「結局の所……Sってなに？」

それは掘返さなくても良かったのに。

説明しないといけないのか？

でもどう説明する？

無心で義務的に説明するのがダメージが低そうかな。

例えば、Sとはサディズムの略であり、加虐趣向という意味合いだ。沙希ちゃんの笑顔ときたら肉食獣が獲物で戯れる時の悪趣味な意地悪さを感じさせる。まさしくいじめっ子のそれだ。もう少し心優しい子に育って欲しい。あと眼が毒々しい。

こんな感じ……ケンカ売ってるじゃん！

どこが義務的だよ！？ いや自分でやったことだけど。

「ごめんね、Sな上に眼が毒々しくて」

意地の悪い笑みが再発しやがった。

声も出してないのに責められるって、そんな理不尽な。

「ごめんねえ、理不尽な人間で……」

更に笑みが深まった。

右手が拳に握り締められてた。

沙希ちゃんが前傾姿勢で駆け出したと思った時には、間近で沙希ちゃんを見下げる形になっていた。そして右手が下から突き上げて来て、俺の顎を打ち抜いた。

顎が痛い。あと頭に衝撃が響いてくらくらする。

さすが暗殺集団と呼ばれる七夜だけのことはあるね。そこらにいる大人のパンチよりよっぽどキツインじゃないかこれ。

「さて、スッキリしたことだし姉さんの所に戻って夕飯食べてきなよ」

「そ、そうする……じゃ、また後で」

手を振りながら、部屋を出て行った。

そして廊下をふらふら歩く。

にしても本当に効いた。まだダメージが抜けない。

見た目に騙された。あんなパンチ持つてるなんて詐欺なんじゃないか？

こんなことなら避けた方が良かったのかもしれない。

躲せないことはなかった、と思うし。

でも眼が潤んでる様に見えたんだよね……錯覚かもしれないけど、あれ見たら体が動かなかった。

心を読むのは辛い、想像できるけどやっぱり辛いのかな。

俺が来た時には魔眼が発動されてたから常時発動してる可能性だってある。なら、沙希ちゃん次第じゃあるけど、魔眼殺しを作るのも考えた方が良くかもしれない。

今の俺じゃ材料的にも技術的にも作れないけど、秋月さんに手伝ってもらえばなんとかなりそうだし。

友達になろうと思う。

打算に塗れたそれだけど、割と本気で。

友達になる。

これから此処に住む以上、その方がきつと楽しいだろうから。

なお、瑞希さんの料理は普通に美味しかった。

4話 七夜の里入り（後書き）

今年中に更新できて良かったです。
もう間に合わないかと思いました……。

さて物語はついに七夜編に突入！
原作キャラまであと少しです！
月姫の、という注意書きが必要ですが。
次回から七夜の体術が始まります。

5話 七夜の体術

早朝、瑞希さんと朝食作って食べた後、緑あふれる里の広場に連れて来られた。

どうも今日から七夜の体術を教えられる様だ。

ここは年少組の集合場所だそうで、明日以降も俺はこの場所に集まることになるらしい。子供が数人いるのはそれが理由な模様。

ちなみに瑞希さんは違う場所であり高度な体術を学ぶそうだ。だからここでお別れしてまた夜会おうねーとなった。

あと沙希ちゃんは大抵 訓練の始まる寸前に来るらしい。寝過ごして遅刻することも稀にあるんだとか。

大丈夫なんだろうかそれは……。

なお沙希ちゃんの朝食はちゃぶ台の上に置いてある。

俺の初料理……記憶にある範疇では初料理……瑞希さんに手伝って貰ったけど初料理だ。冷めない内に食べて貰えなかったのは少し残念だったな。でも瑞希さんは沙希ちゃんを起こしに行かないみたいだから仕方ない。俺が起こしに行けば良かったのかもしれないが……俺が起こしに行けば良かったんだよね。

明日から起こしに行くか。

「ねえねえ、君って外から来たの？」

「外つてのがこの里の外からって意味ならそうだよ」

脊椎反射で答えてから男の子が近くに居るのに気付いた。

一体いつの間に。

この優しそうな顔立ちしてる少年もやはり暗殺者候補生ということ

となのかな。

なんというか、嫌な世の中だね。

「やっぱりそうか。じゃあこの近くに住むんだよね！」

「そうなるね。ところで君は？」

「僕は志貴って言うんだ。よろしくね！」

「こちらこそよろしく。羽間 真琴だ。好きな様に呼んで」

「じゃあ真琴だね。僕も名前で呼んで欲しいな」

「そっか、ならそうさせて貰うよ、志貴」

名前を呼んだら眩しいくらいの良い笑顔になった。

おー、良いなー和むなー、何より子供らしい。

秋月さん所の女の子と言い沙希ちゃんと言い、あまり子供らしい子供に会ってなかったから感じ入る所がある。

「ところで里の外から来る人って俺以外にも居るの？」

「大人の人がたまに来るけど、住んでる人は真琴以外には居ないよ。それよりさ、外のこと教えて？ 僕は里から出たことないから気になってたんだ」

「ん、良いよ。そうだな、外には皆が憧れる様な存在がいて……」

子供の好きそうな正義の味方の話をしてあげた。他にも外の食べ物やおもちのことも話したけど、食いつき良かったのは正義の味

方の話だった。淒く和む。

俺も志貴の反応は見て面白。子供の中でも特に志貴は純粹そうだ。

「あ……」

そんな楽しい会話の途中、志貴がいきなり沈んだ顔になった。

え、何故？ と思って志貴の視線を追ってみると、沙希ちゃんがこつちに歩いて来てた。その眼は相変わらずの毒彩色、そして眠そうだ。あから様に寝起きじゃないか。

しばらくして沙希ちゃんが近寄って来た。

「寝起きだけど、悪い？」

本日の一言目がそれって一体……。

「作った料理が冷めるのは残念だったよ。それとおはよう」

「あれ真琴が作ったの？ それはその……ごちそう様、姉さん程じゃなかったけど美味しかったよ」

「さすがに瑞希さんにはまだまだ及ばないよね。お粗末様でした」

「要精進だね。まああんまり変な物じゃない限りは食べて上げる。

……………あと、おはよう」

えと、最後なんて言った？

悪いけど聞こえなかった。

「……………何も言っていない」

そう？　ならなんでそんな拗ねた顔になってるんだろう。
そしてなんで睨んで来るんだ。

謝った方が良いのか少し迷うんだが。

……………ところで志貴がいつの間にかいなくなってるんだよね。
さすがは暗殺集団の一員だと言った所か。

心臓に悪いんだけどこれって慣れなきや駄目なのかな。

それから少しして20代後半くらいの男性がやってきた。
何を隠そう彼が七夜の体術の教育係なんだそうな。「何も隠して
ないけどね」そこはノリだよ。あとどさくさに紛れないで沙希ちゃ
ん。

七夜の年少組の皆さんに紹介された。
まるで転校生みたいな気分だ。あながち間違っちゃいないだろう
が。

そして俺以外の皆は走り込みである。

体術の練習の前に必ずやることになるらしい。

俺は明日からだけどね。今日は走り方を教え込まれるそうだ。

教えられる走り方ってどんなだろう。

なんて思ってる内に走り込みが開始され、皆が走り去っていった。
それを見送って理解した。

走り方が皆一様に、額が地面スレスレをいく物凄い前傾姿勢だったのだ。

なんで転ばないの？ そんな疑問が湧いて出る上にしかも速い。少なくとも持久走の速度じゃない。

七夜は一種の超人であるという話は聞いていたが、なるほどこれを見せられては納得するしかない。しかもこれで皆 子供。じゃ大人はどんなだよと先行き不安になる。

てかね、これを俺にやれとか無理じゃないかな。

人間ってそんな芸当できない作りになってた筈なんだよ。魔術師でもそこは一応同じな筈なんだよ？

なのにな。

「皆の走り方を見て頂いたように、あれが君に教え込む走法です。私も手本を見せますので、頑張って体得していきましょうね」

20代後半の教育係の男性、達樹さんその人が良い笑顔で言うてくるのですよ。

個人的にはあれ無理じゃね？ とか思ってるんだけどな。

そもそもあれは真つ当な人間がやれて良いような走り方じゃない。四足獣か骨格レベルでそれ様に仕立てられた人間くらいしかあの走り方はできないだろう。七夜は特殊である、そんな基本にして象徴のような移動術だ。

そんな体技を使うには俺の身体適正を把握し認識するに……可もなく不可もなく。

思ったより適正あるな。そっぴや俺も七夜の血が母親分だけ入ってるんだっか。

「では今から見せるのでよく見ていてください」

軽く現実逃避してる内に達樹さんが実演に入る所だった。
とりあえず目の前に集中しよう。

達樹さんの体が傾き、そして獣の様なしなやかさで地面を蹴り、
急加速した。遠目なのに危うく達樹さんの姿を見逃しそうになる程
に。そしてある程度の距離を一息に走った所で、あれだけの速度を
完全に殺し切って急停止までしてしまう。

この移動術の特筆すべきはやはりあの急制動だ。

停止状態から最高速に移り、最高速から停止状態へ。しかもそれ
を音も経てずにやってのけるのだからもはや呆れるしかない。

ついでにこんな事までわかる武術が天才級という神様（自称）か
らの贈り物にも呆れるしかない。

しかしあれだけの動きして呼吸が乱れてないってどうなんだろう。
近くまで来た達樹さんを見る限りなんともなさそうなんだが。

「どうですか。あの走法のやり方は理解できましたか？」

「そうですね、大体は理解できました」

「ほう、そうですね。では実際にやってみましょう。どこか違う場
所があれば指摘するので失敗を恐れず思い切ってやってくださいね」

返事を返し、頭の中だけであの移動術をシミュレートする。

幾度かの失敗を得て拙いながらも成功、更にそれを繰り返し変な
所を潰し理想的な形へと近づけていく。

頭の中ではある程度形になった。

あとは実際にやってみせるだけだ。

脱力から入り、重力に身を任せて体を傾ける。地面が迫るにつれ全身の筋肉をひたすらしなやかに駆動させ、右足を軸にして一気に前へ跳ぶ！

前傾を保ち獣のようなしなやかさで駆け続けるが、酸素が足りない。骨格が僅かにブレている。身体がこの技術に適し切っていない。短期ならともかく長期この移動術を使うのは無理だろう。所詮七夜の血が半分しか入っていない俺ではこの体技を持て余す。どこるか仮にあの異常な再生力もなしにこの体技を使い続ければその内体を壊してしまう。

基本となる移動術でこれでは七夜の体術を極めることは俺じゃ無理だろうな　と。

全身を使って勢いを殺し、音も経てずに止まった。

「ふっはあ！　はあはあっ、ふう……！」

疲れた！

果てしなく疲れた！

全然呼吸が落ち着かない！

この移動術を使って走り込み？　無理無理死ぬって！　根性論では覆せない現実はあると思うんだ。俺って純正七夜培養じゃないしね！

だよね達樹さん！　と期待の視線を送って見たらポカンと口の開けた達樹さんがいた。

「……まさか初めから成功させるとは、驚きました。どうやら君には才能があるようです」

なんだろう、褒められてるのに嫌な予感がする。

「これなら明日には真琴くんも早朝の走り込みに参加できそうですね。今日はこのままその走法を完全に習得してしましましょう！私から見ても完成度は高いですから後一息ですよ！」

「い、いえあの、これ俺の体には合っていないってどうか。あまり連続して使うには体に優しくないって言いますか、少なくとも走り込みして良いほどの走法に適正がないんですが」

「始めはそう思つかもしれませんが大丈夫です。完全に習得すれば走り込みにも耐えられるようになります。それに安心してください。君はおそらく才能があると思いますから」

にこりと安心させる様な笑顔ですが、不安でなりません。

だけどとりあえず完全に習得しないと反論も出来ない。

うう、実は達樹さんの言う通りで、長期使えないってのが俺の思い込みだったら良いんだけど。

皆が戻ってきた。

走り込みに行ってから大体30分ほど経った頃に一着だった志貴が帰ってきて、そこからちらほら皆が帰り出した。そして1時間経った頃にはもう皆が戻ってきていた。

かなりの距離を走ってきたのだろう。それもあの走法でだ。口々に「疲れたー」やら「もう走りたくない」やらネガティブな言葉が聞こえてくるが、それでも俺は皆へ尊敬の念を抑えられそうにない。

「なんていうか、大丈夫？」

見下ろしながらも心配そうな顔をしてくれる沙希ちゃん。昨日は性格歪んでるとか思ったもんだけど……ごめんね、君は優しい女の子だ。その心遣いが身に染みるね。

大丈夫だよ沙希ちゃん。俺もこれから頑張っていくから。

「いや頑張らない方が良いんじゃない？　というか、立てる？」

無理。全身が痛い。気分が悪い。眩暈が酷い。

後ろの大樹つて支えを失ったら座つてることさえ出来そうにない。

「……なんでそんな事に？」

七夜式走り方を習得した結果がこの様だよ。

何度も試行錯誤し実践して、達樹さんから完璧とお墨付きを貰える程にはなった。までは良かったけど、俺にあの走り方は合わなかったらしくてね。長期間の使用や連続使用はお控えくださいという状態だったことが判明したよ。後の祭りだったけど。

お蔭で達樹さんと目が合う度に申し訳なさそうにされてるぞ。

次の訓練は見学、と言い渡される状態にまでさせられたんだから仕方ないのかもしれないけどな。

「今更だけど、喋れないんだ……」

そんな余裕があれば良かったんだけど、口を開けると吐き気がね。

「そう、お大事に。……私はそろそろ行くよ。次の訓練が始まるみたいだから」

ん、ありがとう。いってらっしゃい。

それから皆の訓練、型の反復練習を見ることになった。皆で短い木刀を振るってる。始めに手本となる達樹さんが木刀を振るい、他の皆が続いて振るう。それを繰り返し返してて。

子供だけあって全体的にそう高いレベルの武ではなかった。いや子供としてはかなりのものだろうけど、手本となる達樹さんのそれと比べるとやはり目劣りしてしまう。志貴を除いて。

あいつは別格。天才と言って良いかもしれない。しかも俺と違って天然物の真正正銘な天才だ。

一振り一振り重ねる度にキレが増すなんてどんな出鱈目だ。成長期ということを除いても、目に見えて錬度が上がるなんて異常じゃないか？

ともかく見学しよう。

達樹さんの動きを脳内でシミュレートする。その内には俺からすると身体の負担が大きそうなのが幾つかあった。おそらく基本的な動きしかしていないと思うが、そう考えるとやはり七夜の体術は俺にあまり合っていないのかもしれない。

そんな様子をしばらく見学していたが、訓練も一段落したみたいだ。

皆を休憩させて達樹さんが俺の所に来た。

「次から組み手の訓練に入りますがどうしますか。組み手なので怪我をする可能性もありますし、まだ本調子でないのならこのまま見

学していても良いですが」

「いえ、もう回復しましたから大丈夫ですよ」

「そうですか、では着いて来てください」

という訳で着いて行きます。

森の中でも木の多い場所まで歩きます。

そして達樹さんがこつち来なさいと志貴を呼んで、正面から対峙する形になったんだが。三十センチくらいの短い木刀を俺と志貴に渡されたし、これは志貴と組み手する流れなのかな。

「真琴くんは七夜の体術を学ぶのは今回が初めてですよ。自分が学ぶ体術を今から肌で感じてみると良いでしょう。ルールは有効打を一本入れた方が勝ちです。宜しいですか？」

「そうですね、大丈夫です」

相手が志貴とか初戦から難易度高そうね。

場所も森の中という障害物の多い所だし、武術初心者としては少しくらい容赦してくれてもバチは当たらないと思う所だけどうだろう。

「こんなに早く真琴とやれるなんて思わなかったよ。手加減抜きで行くから本気でかかってきてね！」

そして短い木刀を逆手に持ち替え、やたら堂に入った構えを取る志貴がいた。どうやらやる気満々である。これじゃ全力で足掻かないとすぐ決着しそうだ。

見渡せば年少組の皆が周りで観戦してるし、せめてあんまりに無

様な結果にはならないよう頑張るか。

「それでは二人とも、用意は出来ましたか？」

体を斜めに構え、前に短い木刀を突き出す。志貴みたいに逆手に握ったりはしない。見学した限り前の訓練では逆手の型はやってなかったから、どういう攻撃法があるかも知らないしな。

そして神経に電流を流し、魔術回路を全て起動させる。

「はい！」「出来ました」

「では、始めてください！」

達樹さんの宣言と同時に、志貴から表情が抜け落ちた。そのあまりの落差に寒気が走り、そして志貴の姿勢が沈んだと思った瞬間
目の前から消えた。

七夜は魔術や法術を使わない退魔集団だ。つまり志貴は体術でどこかに消えたということ。

なんて出鱈目 正直舐めてた。

嫌な予感がして咄嗟に志貴の居なくなつた前へ跳ぶ！

直後に視界の隅、俺の真後ろへ志貴が上から降ってくるのが見えた。即座に俺へと木刀で追撃してくる。それを体を捻り短木刀で叩き落とす！

「ッ、nines reinforce（全身補強）！」

強化の魔術で全身の耐久性を底上げし、思い切り地面を蹴って何

度もバックステップし志貴との距離を離す。

本来なら耐久性を上げた所で身体能力は変わらないけど、俺の場合は暴力の概念が体に付加されている。だから耐久性を上げ無茶できる幅を広げれば十分 身体能力の強化になる！ 距離も広げられる！ と思っただけけど、本当に認識が甘かった。

志貴が地面を蹴り木を蹴り迫ってくる。曲芸じみた動きにも関わらず、強化魔術と暴力の概念で底上げされた俺より速い。しかも死角へ入り込むと攻撃が飛んでくる！ 何故か反射的に躲けたけど、それを何度か繰り返す内に志貴を見失った。

「はあはあ、はあっ……辛いな、これ」

気分は狩られる獲物。志貴の姿なんて見えないし、気配なんて感じ方すらわからない。

しかも体力的にも苦しいな。どうも俺は持久力に難があるみたいだ。

「そこッ！」

反射か直感が無意識か、よくわからないがともかく体を捻り短木刀を走らせれば、そこに志貴が地を這うような姿で迫っていた。ただ志貴は目が見開かれただけで、速度を上げ俺の木刀の更に下を掻い潜る。そして至近距離。あろうことが足を折り畳み、折り畳んだ足を真っ直ぐ延ばした反動で蹴り上げてきた。

左手で防御しつつ苦し紛れの蹴りを放つが、志貴の肩を掠める程度。志貴の蹴りは左手の防御なんてなかったかの様に俺を宙に打ち上げるし割に合わない！

「が、くは！」

おまけに肺の酸素はまとめて吐き出させられた。痛い上に苦しいことこの上ない。

だって言うのに地上じゃ志貴が眼を蒼く輝かせ、前傾姿勢に木刀を背中に回した独特の構えを取っている。

そして体を捻り片足で跳んで、宙を舞ってる俺の方に近づく。

さすがに、これ以上は、やられるか！

無理に体を動かし木刀を振り回すが、志貴はほとんど躲す動作も見せてないのに当然の様に攻撃を潜り抜けた。

「閃鞘・迷獄沙門」

全身のバネを余す所なく使い切り、逆手に握った木刀が俺の胸へ

起きたら達樹さんのドアップだった。

……………なんだ、夢か。寝よう。

「ちょっと真琴くん！ 寝ないでください！」

「あ、はい、すみません」

達樹さんが目の前から退けてくれたので起きツ痛た！
なんだこれ、体が痛いぞ。

あ、ああそうか、そっぴや志貴の奥義っぽい木刀攻撃の餌食にな

つたんだっけ。

「……真琴、ごめん。体は大丈夫？」

志貴が申し訳なさそうに隣に立っていた。
え、いつからそこに？ 始めからか……。

「あちこち痛いけど大げさな怪我は……肋骨にひび入ってるな。まあそんな感じ」

「ええっ、それって大丈夫！？」

「さあ、でもしばらく休んでたら治るんじゃないかな」

呼吸する度に地味に痛いけど、我慢できない程でもない。

これくらいなら一週間くらいで全快するだろう。

だからそこまで気にすることはない。志貴みたいな子供が気に病んでるのはあまり見たくない。

それに泣ける話だが、この程度の怪我 日常茶飯事だしね……何を間違ってこんなことになったのかわかんない程に。

「真琴くん、医者をお願いしますのであまり動かないようにしてくださいね」

「はい、わかりました」

そして達樹さんはお医者さん呼びに行った。

里の中に医術に秀でた人が居るって聞いたけど、その人を呼ぶんだろうか。

というかまだ呼びに行ってなかったんだ。俺が気絶してあまり時

間が経ってないのかな？

「ところで志貴、組手つてのは毎回こんな風に怪我人が出るのか？」

「打撲程度ならよくあるけど、骨折とかはたまにしかないよ」

「そっか、でもそれもそうか。毎回こんなだったら身が持たないもんな」

「本当に、ごめん。同世代の子に攻撃当てられたの久しぶりで、つい熱くなっちゃって……」

なるほど、それで本気になっちゃったと。確かに奥義っぽい技やつたし眼が蒼くなってたのはびっくりした。蒼い眼って浄眼だよな。しかし志貴に攻撃当てたって、まさかあの苦し紛れの蹴りのことか？ マグレで掠ったただけなんだけど。むしろ奥義されるくらいなら空振ってれば良かったのに。

「ねえ真琴……もう少し、怒れば？」

後悔のようなことを考えてたら、近寄って来た沙希からいきなり妙なことを言われた。てかなんでそんなムスッとした顔してるんだろっ。

あと皆が沙希見て引いた。

……… なんとというか、随分と怖がられてるんだな。

「そいつは確かにごめんって気持ちで一杯みただけど、そんな怪我までさせられてなんで怒らないの？」

「なんでと言われても、謝ってる相手に怒っても仕方ないじゃない

か」

「……わかんない。私の事と言いつの事と言いつの事と言いつ、なんでそんな簡単に許したり受け入れたりするのかわからないよ。建前ならともかく、心からなんて訳わかんない」

「と言われても、よくわかんないけどそれが俺の性格ってことなんじゃないのかな」

よくわかんない性格、なんか微妙だな。

「微妙どころか納得もできない。……はあ、もう良い。真琴がそれで良いなら良い」

全然良いと思ってなさそうな顔で言われても困るんだけど。
えと、でも俺のために怒ってくれたのか？
そうだとしたらありがとうって言いたい所だけど。

「言わなくていい。納得できなかったただだから」

「そか、ありがとう」

「言わなくて良いって!」

そっぽ向いて去って行った。

なんというか不器用に優しいな、沙希ちゃんて。

しかし初めて会ったときはもつとSな感じだったけど、あれは一体どこに行つ……睨まれた。声に出してる訳じゃないのに理不尽だ。

5話 七夜の体術（後書き）

気付いたら主人公が幼馴染していた。

どうしてこうなったのか自分でもわからない。

脱線するのはいつものことなのであまり気にしないことにします。

それはともかく、志貴出せました！

原作キャラの中でも好きなキャラなので出せてよかった。

メルブラでは使い手ですしね、遠野の方。

次回も七夜ってます。

6話 誕生日プレゼント

七夜の里に住み始めて半年ほど経つ。

半月に一度の割合で秋月さんに里の外へ連れてってもらい、魔術を教えて貰うのも今や慣れて来た。

志貴が魔術見せてと目を輝かせることもある。残念ながらライタ―代わり程度のことしか出来ないけど。そんな魔術は精々手品として使うのが関の山だ。割と好評だったりするけどね……子供の間じや。

七夜の体術も体力続かないのを抜けば順調に習得中。

武術が天才級とは掛け値なしに反則で、今では年少組じゃ志貴の次に強くなった。いやそれより志貴は強過ぎる。あの歳で七夜の体術をほぼ皆伝してるとか、父親に稽古付けて貰ってるとしたって天才としか言い様がない。お蔭で一度も勝てないよ……。

本当は半年も長居する予定じゃなかったけど、秋月さんの娘さんの状態が安定するのに思ったより時間が掛かった。それももう随分と良くなったみたいだから近い内に引越すことになっている。

彼女と久しぶりに会うとなると緊張するな。出会い方が出会い方だったし。

それと七夜の里は好きだったから、ちょっと寂しくなりそうだ。

それから沙希ちゃんだけど、彼女は相変わらずだ。

朝起きるの遅い、朝の訓練に遅れないよう俺が起こしてる。

放つとくと朝ごはん食べない、せっかく作っただからとちゃぶ台へ無理やり座らせる。

心の声に平気で突っ込む、のはもう慣れたな。半年もすればさすがにね。

あと眼が相変わらず毒々しいままだ。

魔眼殺しでなんとかなるかと思っただけど無理だった。秋月さんに譲ってもらい付けてみたがあまり効果がないらしい。眼も毒彩色で変わりなかった。

あとどうやら俺が持つてくる前にも魔眼殺しを貰ったこともあるらしい。その時も駄目だったそうだ。

調べた結果、視覚ごと封じる最高位の魔眼殺しならあるいは……といった所だけど、そんな代物はそうそう手に入らない。それに視覚ごとつてのも問題だ。

結局あの眼に関しては上手く行かない。全然上手く行かない。

別に、俺はもう慣れたから、別に良い。

隠し事をする意味もないって開き直ったし。それに重大な隠し事を持つてる身としては、全て知ってる沙希ちゃん存在には助けられてる面も多い。

だって言うのに、上手く行かない。

沙希ちゃんを、周囲が避けてるのがわかって嫌だ。あの優しい志貴すら避けてる。瑞希さんもなんだかんだで避けてる。何よりも、沙希ちゃん自身が皆を避けてる。

俺に対してたまに沙希ちゃんは加虐的だ。けど皆には大抵いつも加虐的だ。下手に関わりでもしたら容赦なく秘密を暴露する。

沙希ちゃんの傍に居たからそういう場面も何度か見た。昔はそういうことしなかったみたいだけど。

どうして秘密を暴露するようになったのか聞いた時は、その方が楽だと言っていた。

あの毒々しい眼がない俺にはよくわからないことだ。ただ沙希ちゃんがそう言うんなら俺からは何も無い。余計なことしたって意味

がないし。

ああもう本当に、それについては少しも上手く行かない。

ところで俺は現住所を知らない。

場所はわかる。七夜の里だ。魔術を学びに秋月さんと外へ出入りしてるから、仮に一人で外に出ても帰って来れる自信がある。

けど住所はわからない。精々都道府県を答えられる程度だ。

そもそもこんな所に郵便物なんて来ないだろう。宅急便とかもうあり得ない。

そのあり得ない筈のものが、枕元に置いてあった。

子供でも持つて歩ける小さな段ボールに『宅配物』の張り紙。その文字の下には中身の情報らしき字の羅列が書かれている。

今日は俗に言う日曜日、七夜の里でも休日である。

少なくとも子供達にとっては訓練のない自由な日。まあ志貴辺りは父親に稽古を付けてもらってるかもしれないが。ともかくそんな日の起き抜けに、なんてモノを置いてくれてるんだろう。こいつはどう俺を反応させれば満足なのかな。

「……とりあえず、布団 仕舞うか」

宣言通りに布団を仕舞った。

それから部屋を出て洗面所に行き顔洗う。台所で朝食を作り、起きて来た瑞希さんに挨拶したあと一緒に朝ご飯を食べた。それから瑞希さんの外出を見送り沙希ちゃんを起こしに行って、洗面所に行くのを更に見送り、そしてなぜか自分の部屋に戻ろうとした沙希ちゃんを無理やり引き止め和室まで引つ張り、朝ごはんを食べさせる。そのあと沙希ちゃんが自分の部屋に戻ってくの見送り、お茶を淹れ和室でしばらくのんびりと緑茶をすすった。

で自分の部屋に戻ってきた。

置かれた段ボール……すっかり忘れてた。

持ち上げてみると、割と重い。

この大きさでこの重さとは、何入ってるんだ？

張り紙に商品名の欄があった。

『真月譚 月姫 全10巻』

これ、何かのタイトルかな。

種別は、なるほど漫画ね。

ここつて娯楽が少ないから助かるけど、誰が送って来たんだろう。
差出人は、矢白^{やしろ} 瑠美^{るみ}……誰？

いやそれより七夜の人じゃないな。だとすると瑞希さん辺りに頼んで枕元に置いてもらったのかな。でもどうしてそんなことを？

まあ考えても仕方ない。

とりあえず中身を取り出そう。

……………。

うん普通に漫画だね。

古い本くらいしかない七夜の里じゃ重宝しそうだな。

内容にもよるけど、皆に貸したら喜ばれるかも……と、誰か来たか？

「真琴、部屋にいる？ 入るよ。……何それ」

「いらつしゃい沙希ちゃん。

何って見ての通り漫画だよ。真月譚 月姫って言っらしいけど、知ってる？」

「知らない。それ以前に漫画なんて読んだこともない」

七夜の里じゃそう簡単にはお目にかかれないもんな。

そっぴや俺も漫画を読んだ記憶がない。

『俺』のことも含めれば忘れてるだけだとは思っただけど。

「ならこれ、読んでみる？」

「そうだね、じゃ読ませて」

沙希ちゃんが近くに座った。

ところで手に持つてるその可愛らしい包装の袋はなんなんだろう？
気になるけど、聞く前に1巻 渡すか。

「ありがと、それからこれ上げる」

「あ、うん、ありがと。それでこれは？」

「それなりに高いクッキーだよ。真琴って今日が誕生日なんですよ？ だからそれ誕生日プレゼント」

「あれ、今日って俺の誕生日だったけ？ そっいえば……そっか、ありがとう」

想定外だとかいう時に嬉しいな。

誕生日を口にした覚えはないけど、そこは例の如く心の中でも読んで知ったんだろう。

それにしても自分の誕生日も忘れるとは。『俺』が入って来たからちよつとそこら辺に疎くなったとはいえ誕生日を忘れるなんてどうかしてたよ。

だとするとこの漫画も誕生日プレゼントかもしれない。
でもそれなら矢白 瑠美って人は俺の誕生日を知ってるのか。俺の知らない親戚とか？

「これ、開けて良いかな」

「それはもう真琴のだからね。好きにすれば良い。例えば私にくれる、というなら断れないね」

「えーと、じゃあ一緒に食べようか」

そんなに欲しかったのかな。ともかく包装を取る。高級感 溢れるクッキーが出てきた。

……これは美味しそうだ。甘い匂いにどんな味なのか気になってしまっ。

一摘みして口に運び、サクツと砕け溶けていく食感に新鮮さを覚えた。

美味しい。あざとくない甘味が絶妙だ。

少なくともこれは市販の味じゃない。専門店から買い寄せたのか？ それはともかくレシビ欲しい。どうやったらこんな味が出せるんだか。

いやそれよりお菓子は未だ専門外だ。今度挑戦してみるか。

しかし飲み物が欲しくなるな。お茶でも淹れて来よう。

緑茶しかないのは惜しまれるけど、いやなくても充分に贅沢か。

「沙希ちゃんはどうする？」

「んー、お願い」

クッキー食べながら漫画に熱中していた。

まあ楽しんで貰えてるなら何よりだ。

高級クッキーも食べ終わり、どうにかこの味を再現できないかと考えてた所、沙希ちゃんがパタンと音を経て真月譚 月姫 1巻を閉じた。

「非常に面白い内容だね。こんなの誰が送ってきたのかな？」

そして何やら怪しい笑みを浮かべてらっしゃる。

えと、見せない方が良い内容の漫画だったのかな。

あと誰が送ったかなんて俺が聞きたいくらいだ。矢白 瑠美なんて知り合いは俺には居ない、と思う。

「そう、そうなんだ。残念だね。

2巻借りるよ。それからはい、1巻。興味深いことばかり描いてあるから読んでみれば？」

「そうか、面白くて興味深いんだ。わかった、読んでみるよ」

純粹に興味深く面白い内容であって欲しい。

変な本を沙希ちゃんに読ませたとあつては……ねえ。

こんなことで緊張するならまず自分で読んでみるべきだったかな。いつまでも悔やんでも仕方ない。読むとしよう。

……………。

いや待つて、作中に七夜のナイフとか出てきたんだが。

七夜は神秘側だ。秘匿されるべき一族だろう。

さすがにこの固有名詞を漫画に乗せるのは拙い。偶然かもしれないけど、魔術教会に眼を付けられかねない行為だぞ。

あと主人公の名前が志貴なので、なんか変な気分。

……………。

吸血鬼の真祖、アルクエイド・ブリュンスタッドが出てきた。こちら側ではとても有名な実在する吸血鬼ですね。この時点でこの漫画は魔術教会を敵に回したと思うんだけど、どうだろう。

……………。

ネロ・カオスが出た。言わずと知れた吸血鬼、死徒27祖の10位だ。内に無数の獣を飼っているという事前情報とも作中の描写は合致する。どうしてこの危険な内容で漫画化してるのさ、という突っ込みはもういいや。後でまとめて考えよう。今は無心で読み進めるのみ。

沙希ちゃんに遅れること三十分、真月譚 月姫 全10巻を読破した。

あの最後に感動した。

物語として単純に楽しめた。

だけど笑えない。

この漫画の主人公は、未来の七夜志貴だった。

そう、この本には未来が描かれている。

そしてその未来で七夜の里は既に滅んでいた。

作中で志貴は高校二年生。そして七夜志貴が死に遠野志貴として生き返った事件が作中の八年前。この真月譚 月姫という物語通りの未来に進むなら、一年以内に七夜の里は滅びることになる。

「……まいったな」

誰かの悪戯、あるいは戯言と切って捨ててしまえたならどれだけ楽だろう。

未来予知は確かに存在するが、これだけ事細かく未来を知ること

は出来ない。そこまで人の未来予知というのは完璧じゃない。

だからこの本は起きもしないことを適当に描いただけ、と思っていた。けど残念ながら、人の未来予知ならともかく神霊ならやれてしまうかもしれない。

要するに矢白 瑠美は神様（自称）じゃないかと疑ってるんだ。

探せば居なくもなさそうな日本人の名前なのは今更だし。

それにあいつは初めて会った時、細かい知識は追々フォローすると言っていた。まさかこんな形とは予想すらしてなかったけど、この物語がこの世界の未来図ならば確かに重要な情報を提供してもらっている。

とはいえ俺が居た所で七夜の里が滅びるのを止められそうにないのが問題だ。

どのように滅んだのかもわからない。

俺と沙希ちゃんだけがこの情報を持っているんじゃない意味も効果もない。

なら例えば大局へ影響を及ぼせる人物がその情報を持っていたならどうか。

七夜で言えば志貴の父親、一族の当主、七夜 黄理とか。

「それで良いの？ 本の内容の真偽はともかく、知られて良い情報じゃないみたいだね。もし危険そうなら真琴だけ七夜の里から出ればそれで事足りるのに」

ずっと考え込んでた所為か沙希ちゃんに心配かけてたみたいだ。

「でも七夜の皆にはお世話になったから、この里に滅んで欲しくないよ。多少リスクがあったとしてもやれることがあるならやってみたい」

「……真琴って、頭の良さ関係無しにたまに馬鹿するよね」

「よね、と同意求められても困るんだけど」

「自覚がない、これは重症だ。もう手遅れなんだね。何もしやあげられなくて、ごめん」

いやいや口の笑みが抑えきれないからね。
うん、でもちよつと気が紛れた。ありがとう。

当主の家も他の人たち同様に和風な作りになってた。他の家よりは大きいけど、基本的なことは変わらない。今居る和室だって多少大きいくらいだ。

ただ当主がそこに居ると見方が変わるといふか、さすがは一族の頂点。普段は不器用な父親って感じだけど、今の2人で対面している状況では……雰囲気が違う。

俺が黄理さんに真月譚 月姫を渡して以降、もう何時間も読み耽ってる。

あれには一族が減ぶということが描いてあるから怒るのなら解るんだ。仮に悪戯だとしても、あれは冗談にならない内容だろう。

だって言うのに黄理さんは時折くつくつと笑う。愉快そうに獣の様に、そして楽しげに本を読んでいる。

だからと言って純粹に本を楽しんでる風には見えない。
というか、そうだとしたら不気味過ぎる。

そして黄理さんは真月譚 月姫を全て読み終わった。

「いや楽しめた。すげえ愉快だ。しかし誰がこんなのお前の枕元に置いて行っただろうな。心当たりはあるか？」

「差出人の欄には、矢白 瑠美と書かれていました。それが誰かまではわかりませんが」

「そうか、これをくれた奴なら礼を言いに行きたいくらいだったんだがな。ふむ、暇が出来たら探してみるか」

本当に上機嫌だな。

「あの、俺の知る限りその本には黄理さんの死や一族の滅びたというニュアンスのことが描かれてたと思うんですが」

「そうだな、一族壊滅と来れば俺も死んだってことなんだろうな。この本が本当に未来を予知してるなら、だけだよ」

「ということは、黄理さんはそれが悪戯だと思っていると」

それもそうか。

さっきも思っただけど、こんな詳細な未来予知なんてそうは出来ない。普通なら悪戯ないし挑発って思うよな。

「いや確かに半信半疑だが頭っから否定する気はねえよ。何より本当だった方が面白れえ」

「……………ええと、だとしたら一族壊滅の危機なのに、なんでそんなに愉快そうなんです？」

「一族の壊滅なんぞいつかはあるだろうと思ってたからな。特に最近じゃ混血共が俺たちを狙ってるって噂も聞く。だから確信が強まったただけだな」

「だからって愉快的な内容じゃなかったでしょう」

「それはそうだが、ならこの物語の主人公は誰よ？」

主人公の名前は、遠野 志貴。作中における七夜最後の生き残り。
ああそうか。

この月姫という物語上で志貴の行動の何が気に入ったのかは知らないが、結局の所 黄理さんはやっぱり親馬鹿という事か。

「お前いま失礼なこと考えなかったか？」

「とんでもない、当主様相手に邪なことは考えません」

「…………可愛げねえな相変わらず」

そりゃ見た目通りの精神年齢じゃありませんから。

なら中身は何歳だと聞かれても困るけどね。なんせ『俺』の記憶がない。

「志貴のことは置いて、遠野の襲撃に関してはどう思ってるんですか？ この本通りなら七夜は滅びるようですが」

「襲撃はあるだろうって予想してたから今更思うことはねえよ。だ

がそうだな、久しぶりの狩は予想以上に骨が折れそうだったくらいか？」

そこで獰猛に笑うこの人って……暗殺業は随分と前に引退したんじゃないかったのかな。

「それはそうと真琴、お前はもう里から出る」

「はい？」

「はい？　じゃねえよ。里から出る。お前は本来、退魔側じゃなく魔術師側だ。なら里から出たとしても遠野だつてそうは狙えねえ。滅ぶかもしれないこの里に留まる理由はねえだろ」

「……………ええ、ええそうですね。留まる理由がないなんて言えませんが、命は大事です」

そういえば秋月さんもそろそろ羽間の家に来いと言っていた。もしかしたら遠野の襲撃にある程度　勘付いていたのかもしれない。……困ったな。七夜から死なせたくない人を誰か引き抜いたとしても、一族を根絶やしにしようとしている遠野が見逃すとは思えない。俺は羽間だから見逃されても、七夜の間人まで行くとさすがにアウトだ。

あとは遠野家当主の長男と同じ名前を持った志貴が例外かもしれないくらいか。

まったく多少知識を付けたってどうにもならない。本当にどうしようもない。

「ですがすみません、断らせていただきます」

「おいおい、命は大事じゃなかったのかよ」

「大事だと思います。ですが里を抜ける気が起きないんですよ。困ったことに」

もう苦笑いしか出ない。

故郷は冬木の大災害で燃え落ちて、白い世界から憑依して来た『俺』は思い出の欠片すら持ち合わせていなかった。

だから今の俺は七夜の里の事で大半を占められている。羽間にもお世話になってるけど、住んでいるのは此処だ。お蔭でもう失いたくない場所になってしまった。

あとは死にかけ過ぎて、その辺りの恐怖感が麻痺してるのかもしれない。自分のことながら困ったもんだ。

「……フン、妹みたく混血相手に怖がってりや良いものを。死んでも文句言うんじゃないぞ」

「それくらいは心得てますよ。というか、黄理さんって妹が居たんですね」

「ああ居たさ。過剰な退魔衝動の所為で魔に怯え、まともに暗殺業もできず七夜から抜けて行った女だが、確かに居た。あれから平穩の中でそれなりに幸せな人生を贈れたんじゃないかな。もう死んじまったけどよ」

「……そうですか」

こういう話は初めて聞いたな。
でもそう話せる内容でもないか。当主の妹が七夜を抜けて行った
ということとは。

「もう日も暮れましたね。そろそろ帰らせていただきます。
では、今日はありがとうございました」

「おう、そう気にすんな。あとその本は持って帰るようにな。お前の本なんだから」

「はい、わかりました」

真月譚 月姫を紙袋に入れる。

その後、黄理さんに会釈して部屋を出た。

混血である遠野の襲撃は一年以内。

死ぬ気はない。この里を滅ぼさせる気もない。とはいえ俺に何が出来るという訳でもないだろうけど、それでも打てる手は全て打つことにしよう。

わざわざこの里に残ると決めたんだ。

ならせめて後悔しないよう生きないと。

6話 誕生日プレゼント（後書き）

彼女はとんでもない誕生日プレゼントをしてしまいました。
Fateと悩みましたが、七夜の里に居る以上このチョイスにしました。

でも佐々木少年の真月譚 月姫は名作だと思う。

あと原作キャラが続いて登場。

月姫では出番のなかった黄理。

彼は思った以上に書きやすかったです。

次回も七夜でしょう。

7話 煉獄を此処に

やれることは全てやる、その宣言してから2カ月。

あの想いは嘘じゃない。けど、その……現実の壁は重く押し掛かったというか。

俺って所詮は子供であって役立たずだったんだね。

あれから何か出来たことと言えば、周りに危機感を煽るくらい。それも一歩違えば不安を煽ってどうするな状況になりそうだったし。魔術トラップの一つや二つ作れば良かったんだけどね。生憎と俺の技術じゃ小動物を罠にかけるくらいが関の山。そもそも外界に働きかける類の魔術適正は軒並み低い。

まともに用意できた対抗策なんて秋月さんに譲って貰った小太刀くらいだ。

くるりくるりとそれを掌で弄ぶ。鞘は勿論付けてるけど。危ないし。というかこんな芸ばかり上手くなっても仕方ないんだけどね……。

クルンと回して懐に入れる。

この小太刀は混ざりものに対する概念武装だ。

効果は多少切れ味が良くなるって程度ではあるけど、あるのとないのとは大違いだろう。と思いたい。

ああでも秋月さんへの借りが沢山増えていくなあ。

これ返済し切れるのかな。

雰囲気的にもうすぐな気はするんだ。

瑞希さんと沙希ちゃんのお母も久方ぶりに帰って来てる。

襲撃に備えてだと思う。

あの時に想定した一年以内というのは最高一年って意味であって、実際にはやっぱりそれほど時間なんてないみたいだ。

「……………」

それにしても魔術トラップが弱すぎる。

地雷よろしく踏んだら火が出る形にしてみたが、火傷くらいしか負わなさそう。

解除しよう、うん。このままじゃ無駄に危ないだけだ。

あとは、とりあえず眠い。

満月が空高くにあることで今が真夜中だと教えてくれる。

眠いはずだ。子供ならもう寝てる時間だね。

魔術の鍛錬に熱中し過ぎたな……失敗した。

暗い森の中を歩いて帰る。

普段も寒いけど夜になると一層冷えるね。吐く息まで白くなる。もう少し厚着して来れば良かったかな。

遠くから、音が聞こえた。

随分と騒がしいね。

一体なんの音だろう。

歩く度に音は鮮明になってくる。

よく耳に響く、金属音がこすれ合うような音。

複数。水音も。耳慣れない音もちらほらと。

森の奥に明りが見えた。

心臓の音が煩い。

まるで羽間家の山で黒い犬に出会った時みたいに脈が早い。

しばらく歩けばよく見えた。

よく聞こえた。

森が……燃えている。

既視感だ。

こんな光景は前にも見た。

黒い太陽、漏れ出る泥、焼け付く地面。

そして……………。

広場まで歩いた。

血だらけだ。

肉だらけだ。

不出来な死体が転がっている。

地面が燃えている。肉も燃えている。匂いが懐かしくて吐き気がする。

知ってる人が居て、見るに堪えない死体になっていた。それは姉代わりの人だったり、体術を教えてくれた先生だったり、よくお世話になった医者代わりの人だったり。

全員がどうしようもない程に死んでいた。

こんな地獄を、よく知ってる。

何度も夢に見た。

ああでも、アレに比べればこの地獄はずっとマシだ。

アレと比較してしまえば生温いとさえ言える。

あんな最悪な災害に比べたらこんなの、どうってことないと言えない。

なんせ、黒い太陽がない。溢れ出る泥だってない。最悪からは程遠い。

「ハハ、ハハハ、ハハハハハハ……」

氣力が無くなってくる。

嫌になってくる。

言うにこと欠いて『どうってことない』ってなんだよ。

大事な場所だったんだ。この里は。

滅ぶかもしれないと知っても、残ろうと決めたくらいに大切な場所だったんだ……。

だけど虚しかった。

悲しいじゃなくて、苦しいでもなくて、ただ虚しかった。

いつもそうだ。冬木の大災害で両親を失い、友達を失い、居場所を失い、全て失って。その後には黒い犬を殺して。なのにそのどれ一つ、ともに悲しめてなかったじゃないか。

これまでは『俺』が入ってきたから混乱してるんだと思ってきたけど、もう誤魔化しようがない。

どうも俺は、救いようのない欠陥品の類らしい。

馬鹿みたいに突っ立っていた。
動く気が起きなかったから。

そうしてしばらくすると、森の向こうから青年が歩いてくる。
片目が髪に隠れた顔は厳つく、筋肉は鎧のようだ。その巨体がゆ
らゆらと蜃気楼のように霞んでいる。

蒸気が上がっている。返り血に塗れた男の体から気化している。

紅赤朱と、先祖返りした混血をそう呼ぶらしい。
くれなゐせきしゅ

きつとあれがそうなんだろう。

七夜の血が半分だけの俺でさえ、魔の匂いが鼻に付く。

心臓がより煩く鳴り響く。

七夜の血が体を動かして、概念武装の小太刀を懷から取り出し鞘
から引き抜く。

それでも気持ちに乗らない。

どうしようもないほど心が冷え切ってる。

ああでも七夜としては都合が良いのか。

心を凍らせて身体を殺人機械に作り変える。

それこそ七夜黄理という暗殺者が、殺す者の至高として提示した
姿だ。

それに悪い環境でこそ本領を発揮するのが七夜。ならばこの血の
池に肉の沼というのも悪くない。

「お前は、七夜か」

紅赤朱が笑っている。

笑顔を作り慣れてない感じだから不出来だが、楽しそうで酷く純粹そう。

人を殺すのがそんなに楽しいのかな。

心の底から結構なことだ。笑えない奴よりはずっと良い。

「俺は七夜じゃないよ。一応 羽間の魔術師になるのかな。そういうアンタは遠野の人？」

歩いてくる紅赤朱との距離を測りながら声を掛ける。
気分は乗らないが、血が反応するのだから仕方がない。

「軋間、紅摩」

紅赤朱……軋間が腕を正面に構える。

そして踏み込んできた。
腕を突き出してくる。

心を冷やし、集中する。

極度の集中を持って一瞬の体感速度を停滞させよう。

七夜の秘奥『閃鞘 迷獄沙門』という技における基盤となる技術だ。

腕の動きがよく見える。

地面を蹴って後ろに跳び、大樹の幹に着地し体を捻って突き出された魔手ごと軋間を飛び越えた。

突き出された軋間の腕が大樹に打ち付けられ、幹が握り潰された。出鱈目と呆れるべきか危うく死んだと冷や汗を流すべきか……殺せば一緒か。

空中で体を捻り、小太刀を軋間の首筋に走らせ あまりに
硬い感触に手が痺れる。軋間の首には傷一つない。逆に刀身がひび
入ってる。

これは、ちよつと、予想してなかったな。

着地して、体感速度が戻った。

大樹が倒壊し地面に打ち付けられる地響き。

そして再び振るわれた軋間の魔手は、着地直後じゃとても躲せな
い鋭さがあつた。咄嗟に体を捻って直撃だけは回避できたが、掠つ
た。それだけで体が回って地面に打ち付けられる。

鎖骨辺りが挟れていた。

血が凄く出てる。

それだけで子供の体には致命傷だ。

早く処置しないと助からないなこれは。

「鳴 呼」

不幸中の幸いなのか知らないが、瀕死の俺に興味を失くしたらし
い。

妙な叫び声を上げながら、新たな人を求めて彷徨い始めた。

大人しく倒れていたなら軋間が見えなくなっていた。

どちらにせよ死に体だが。さすがに血を流し過ぎたね。

それにしても、沙希ちゃんに志貴は大丈夫かな……………と考えて
も仕方ないことだったかな。

どうせ失っても虚しいだけ、気にする必要もない。

それに命は大事……なんてのも今更な、しかも既に手遅れ気味だよ。

里から逃げてれば良かったかなあ。

そうすれば俺もこの虚しさに気付かずに済んで、ないか。遅いか早いかの違いか。里から出たとしても、いつか何かを失くして気付くんだ。こんなどうしようもない欠陥に。

それは嫌だな。

思い知らされるのは嫌だ。

嫌だよ、嫌だ。

せめて泣きたかった。

両親へ向けて、友達に向けて、七夜の人たちに向けて。関わった人達に、せめて悼むくらいしたかった。

これ以上、思い知らされるのは嫌だ。

これ以上、虚しい感慨になんか浸りたくない。

これ以上、地獄なんか見たくもない。

「……結局 何も失いたくないと、結果的に答えは変わらないんだよね」

一週回ってそんな結論に達し、ほとほと呆れ果てる。
実際ため息ものだ。本当に下らない。

立ち上がる。

血が足りない所為か、足取りが覚束ない。

「補強」

強化の魔術を掛ける。
耐久性を引き上げる。

更に『暴力』の概念を出力し、肉体の上限を取っ払う。

ここから先、一步踏み出したらもう止まらない。振り切れてしまおう。

元から魔術というのは、振り切るだけなら簡単なんだ。

元の俺はもう冬木の大災害で死んでいる。

『俺』だって死んで白い世界に来た。

今の俺すら羽間家の山で死んでいる。

ならまあ、良いんじゃないか、別に？

もう十分すぎる程の余分を貰ったよ。

命は大事だから、何よりも凄まじい燃料になってくれるだろう。
ならばこの際、残らず燃やし尽くしてしまえ。

退魔衝動は働いている。

薄いながらも魔の匂いを察知してる。

だから少しだけ、せめて里に残った者として。
出来ることは全てやると決めたんだ。

だから七夜の体術は体に合わなかったとすっぱり諦めて、軋間を
真向から叩き潰しに行こう。

もしもそれが誰かの助けになったのなら、意味があったと胸を張

れる。

一步踏みしめ、地面を蹴った。

七夜らしからぬ騒音をたて、一気に悪夢のような速さに達する。地面を蹴り土が舞い、木を跳ね幹がしなり、体を捻って必死に制御する。少しでも足を踏み違えればそれだけで死ぬ速度域にある。加え一步ごとに無茶な反動で足の痛みが増す。

だがそれだけした甲斐はあった。僅か一分足らずで軌間が見えた。強く硬く拳を握り、極限の集中を持って体感速度を停滞させる。

俺に気付き振り向いた軌間の顔面へ、拳を入れた。

拳の肉が裂かれ、骨がひび割れ、骨格から歪み、筋肉が断絶し、それでも腕を止めず、全力で殴り飛ばす。木々を幾つも巻き込みながら砲弾の如く飛んで行き、遠くで軌間が倒れ伏した。

だが終わってない。

炎を振りまきながらゆっくりと起き上がり始めた。顔に痣が出来てるものの、まだまだ健在のようだ。

引き換えこちらの代償は大きい。

右腕が真っ赤で骨も所々突き出てる。

これはもう頑張ったって動かせないな。

という道理に付き合う必要なんてないだろう。

武術の才能をあげるとあの神様は言ってたが、その実態は身体把握能力の向上だ。根本的に言えば武術関係ない。動かせない腕を動かすという方がまだ正しい使い道だろう。

なら動かせない筈はない。

右腕の骨が駄目だというのなら、周りの肉で補えば良い。

ゆっくりと右腕を動かし、手を握り込む。

やはり動かせる。がこれだけでは足りない。こんな動かすのさえ一苦労な様じゃさすがに軋間と潰し合いは出来ない。

なら補えば良い。

足りないなら他から引つ張るのが魔術師だ。周りの肉でも補い切れないのなら、魔力をもって右腕を補い、無理やりにも状態を正せば良い。

「其を正しき姿へ」

自己暗示の呪文を紡ぐ。

鈍く白い魔力光が右腕から漏れた。

これで機能だけは正常値だ。

怪我は治らないけど、この一戦程度なら十分。

さあ準備は整った。

ならば七夜の怨敵へ声高らかと宣戦布告しよう。

「旅は道連れ世は情け、てね。」

黄泉路までお付き合い願えますか、紅赤朱？」

「！！！」

7話 煉獄を此処に（後書き）

主人公が反転したの巻？

反転というより回転ですね見事に一週 回転してます、してたら良いな……。

という訳で七夜編クライマックス前篇でした。

中編か後編に続きます（タイトル上は違います）。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8811o/>

運命の外側

2011年2月4日00時37分発行